翻　訳

マーク・ディケンズ著
「総大司教ティモテオス１世とテュルク人の首都大司教」

山内　和也※・吉田　　豊※

※　帝京大学文化財研究所

訳者前書き

総大司教ティモテオス1世とテュルク人の首都大司教
要　旨
ティモテオス1世と彼の書簡
書簡の背景
テュルク人のキリスト教への改宗
ティモテオスの書簡におけるテュルク人の同定
カルルク人
文献と考古学による裏付け
改宗の動機や要因
追　記

訳者前書き

本翻訳は、Mark Dickens, Patriarch Timothy I and the Metropolitan of the Turks, *Journal of the Royal Asiatic Society*, Series 3, 20/2 (2010), pp. 117-139の全訳である。日本語訳の出版を快諾して下さったMark Dickens博士とJournal of the Royal Asiatic Societyの編集部に感謝する。

帝京大学文化財研究所は、キルギス国立科学アカデミーと共同で、2019年からアク・ベシム遺跡の第１シャフリスタンの南東隅に位置するキリスト教教会址（AKB-8）の調査を行っている。この教会遺構は、1996～1998年にセミョーノフによって部分的に発掘されたものである（セミョーノフによる発掘調査に関しては、山内･岡田訳「スイヤブ（アク・ベシム遺跡）のキリスト教会―第８号遺構：キリスト教会複合体―」『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集, 2020, pp.247-319を参照のこと）。

この大規模な教会遺構を発掘したセミョーノフはこの教会を10世紀頃のものと考えている。しかし、都市としてのアク・ベシム遺跡そのものは、10世紀には衰退へと向かっており、11世紀にはほぼ廃墟となっていたと考えられるうえに、出土するコインは第1仏教寺院（AKB-1）と同じであることから、このキリスト教会（AKB-8）もそれと同様に８～９世紀の遺構と考えることができる。第1シャフリスタンの外側、東北側でもクズラソフによる発掘調査によってキリスト教会（AKB-4）が発見されており、出土するコインから判断してほぼ同じ時代のものと考えられる。また、同時代と考えられるキリスト教関係の遺物が、アク・ベシム遺跡の北西に位置するクラスナヤ・レーチカ遺跡、さらに西方のタラスでも発見されている。カラハン朝成立以前にあたるこの時代、つまり８～９世紀には、この地域はおおむねカルルクにより支配されていたことが知られている。このように８世紀から９世紀にかけてチュー川流域では、他の諸宗教とともに、シリア東方教会のキリスト教（いわゆる「ネストリウス派」のキリスト教）が信仰されていた。この地域に何時どのようにキリスト教が布教されるようになったのかについての研究は少ない上に、定説と呼べるような説も存在しないというのが現状である。

その一方で、シリア東方教会の大司教であったティモテウス１世Timothy I（780～823年）の時代にテュルク人がキリスト教に改宗し、その土地（Beth Ṭurkāyē）に首都大司教座が設置されたという記録があり、そのテュルク人がどこにいたどの民族であるかについて古くから議論されていた。ここに翻訳するディケンズの論文は、東方キリスト教研究にかかわるシリア語の文献研究の専門家であるディケンズが、この記録を取り上げ検討したうえで、問題のテュルク人はチュー川流域にいたカルルク人であると論じたものである。彼はまた、カルルクの当時の指導者がなぜキリスト教を選んだのかについても興味深い推論をしている。ディケンズの議論が正しければ、チュー川流域にキリスト教が導入された時期や歴史的な背景について極めて重要な視点が得られたことになる。

翻訳者の１人である吉田は、2018年に発表した論文（「貨幣の銘文に反映されたチュルク族によるソグド支配」『京都大学文学部研究紀要』57, 2018, pp. 155-182）において、ディケンズによる同論文を参考にしながら、ソグド語の世俗文献に在証されるtwrkstn「トルキスタン」という地名は、その用例から商人を含むソグド人が数多く居住するチュー川流域を指示する可能性が高く、それがシリア語のBeth Ṭurkāyēと同義であると論じたことがある。古代チベット語の年代記の Drugu yul「トルコの地」もまた同じ地域を指示しているか、少なくとも同じ地域を含んでいるように見える（Ch. Beckwith, *The Tibetan Empire in Central Asia,* Princeton, 1987, pp. 63-64, n. 56）。

アク・ベシム遺跡は、かつては砕葉すなわちスイヤブ Suyab と呼ばれ、西突厥以来この地域の主邑であったから、Beth Ṭurkāyē に設置されたという首都大司教座が砕葉に設置された可能性は高く、翻訳者である山内と吉田は、第１シャフリスタンにある規模の大きいキリスト教教会址（AKB-8）こそがそれであるという作業仮説を採用している。一方、ディケンズ自身は、ナルシャヒー Narshakhi の『ブハラの歴史』に記録されている、893年にモスクに改変されたというタラスにあった大きな教会がそれではなかったかと考えているように見える。

この時期のキリスト教はチュー川流域を越えてシルクロード沿いに、トルファンをはじめとするタリム盆地のオアシスへも伝播しているだけでなく、天山北麓も東進していた。11世紀初頭のケレイトの改宗はその延長線上にある可能性もあるかもしれない。このようにモンゴル時代以前の内陸アジアの遊牧民のキリスト教信仰についての研究は、チュー川流域地域で発掘される遺構や遺物と結びつき、ここに来て文献に記された伝説的な出来事であることを脱して、我が国ではこれまで予想もされなかった具体性を帯びたホットなテーマになってきている。それゆえ、帝京大学文化財研究所によるキリスト教会址（AKB-8）の本格的な発掘の開始という機会を捉え、帝京大学文化財研究所研究報告にディケンズの論文の翻訳を掲載することとした。

最後になるが、この翻訳の下訳は鷹野ほなみが行ない、山内和也と吉田豊が修正および加筆を行ったものである。本文中の〔　〕は補訳として山内と吉田が追加したものであり、必要に応じて訳註を付した。

総大司教ティモテオス１世とテュルク人の首都大司教

マーク・ディケンズ[1)]

要　旨

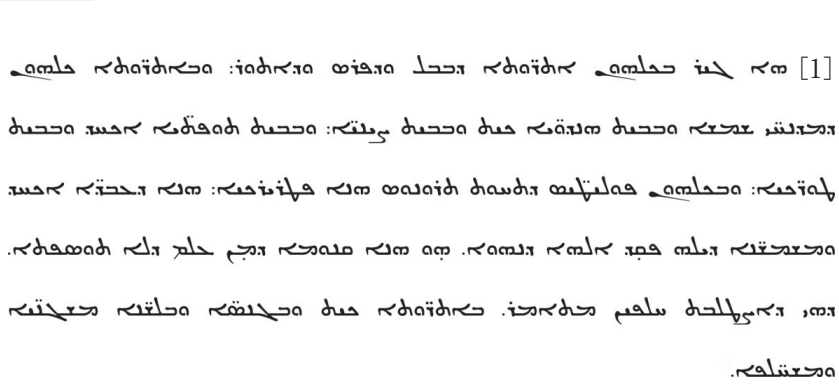
総大司教 Patriarch ティモテオス１世 Timothy I（780～823年）[訳註1)]が在位していた間、東方教会 the Church of the East はアジアへと進出し続けた。首都大司教 Metropolitan はバグダードにある総大司教座 Patriarchal see の東方にあるさまざまな場所に任命された。彼らのうちの１人が、謎に包まれたテュルク人の首都大司教であり、その者が何処にいたかについては、何十年にもわたり研究者たちの間で意見が一致していない。この論文は、その当時、中央アジアに居住していたさまざまなテュルク人の集団を体系的に考察することによって、「ティモテオスが任命した首都大司教を受け入れたのはどのテュルク族か」という疑問に答えようとするものである。ここで得られた結論を支持するために、文献と考古学の証拠を考慮に入れ、改宗において役割を果たしたであろう、さまざまな動機や外的な要因を論じることとする。

ティモテオス１世と彼の書簡

ティモテオス１世（780～823年）[2)]は東方教会[3)]のもっとも偉大な総大司教の1人であった。教会運営の責務を果たしたことに加え、多作な著述家でもあり、科学や神学、教会法について執筆し、数多くの書簡を書いた。彼は総大司教であったときに多くの書簡を書いたが、その多くは現存している[4)]。そのうちの2通は中央アジアにおけるキリスト教の歴史を理解する上で驚くべき情報を提供している：その２つとは、「聖マロン修道院の修道士たちに宛てた書簡 XLI（ܠܓܢܐ ܕܡܪܝܐ ܕܡܪܝ ܡܪܘܢ）Letter XLI to the Monks of the Monastery of Mar Maron」と「セルギウス Sergiusに宛てた書簡 XLVII（ܠܓܢܐ ܕܠܣܪܓܝܘܣ）Letter XLVII to Sergius」であり、それぞれ792/93年と795 ～ 798年のものである[5)]。

最初の書簡は、シリア正教会 Syrian Orthodox[6)]から頻繁に迫害を受けていた北シリアの単意論派であるマロン派 the Maronites に宛てて書かれたものである。その手紙はカリフのハールーン・アッ -ラシード Harun al-Rashid〔アッバース朝の第５代カリフ、在位786 ～ 809年〕の前で、ティモテオスが彼ら〔マロン派〕のために仲介することを求めるように、彼ら〔マロン派〕に促すものであった[7)]。２番目の書簡は、ティモテオスの親しい友人であり、彼が他の誰よりはるかに頻繁に手紙を送ったエラムElamの首都大司教であるセルギウスに宛てて書かれたものである[8)]。２つともティモテオスによるテュルク人のための首都大司教の任命についてふれている[9)]。

書簡XLI[10)]



［1］というのも、見よ、バベル Babel［バグダード］やパルス Pars［ペルシア］やアースル Āthur［アッシリア］の国のすべてにおいて、そして東方の全土やベス・ヒンドゥワーイェー Beth Hinduwāyē において、そして実にベス・スィナーイェー Beth Ṣināyē において、ベス・トゥプターイェー Beth Tuptāyē において、そして同じくベス・トゥルカーイェー Beth Ṭurkāyē[11)]においても、そしてこの総大司教座の下のすべての領土において、――［それは］神が我々にその（司

教座の）しもべであり、また同じくその（司教座の）聖職者 minister であるように命じたこの［司教座の］ことである――この自立存在であるあのお方――その方はとこしえから存在し、増えることなく、我々の代わりに十字架にかけられた人――（その方は）実に異なる、さまざまな土地や人種や言語で讃えられるからだ。

［2］

［２］[12]なぜなら、見よ、我々の時代においてさえ――私が教会の運営の職務を任せられてきたこれまでの10年よりも以前、それというのも私は今も［これで］おおよそ13年間[13]この職務を遂行しているからなのだが、――トゥルカーイェー Ṭurkāyē の王は彼のおおよそすべての領土とともに、神を信じないといういにしえからの過ちを犯さなくなった。というのは、彼はメシアの偉大な力の働きによってキリスト教についての知識を持つようになったのである。それ［はメシアの力］によってすべて［の人たち］が彼［＝メシア］に従うからである。そして、彼は、書面で彼が自分の王国の領土の首都大司教をどうしたら任命できるかについて尋ねてきている。これもまた、我々が神［のご援助］によってなしたのである。そして、我々の主がお喜びになるのであれば、我々が彼に書いた書簡を、あなたにも送るであろう。

書簡XLVII[14]

近頃聖霊は、ベス・トゥルカーイェー Beth Ṭurkāyēの首都大司教を任命し、我々はまたベス・トゥプターイェー Beth Tuptāyē のためにもう1人［の首都大司教］を任命する準備をしている。

書簡の背景

書簡XLIはティモテオスが、教義と教会組織の上で東方教会に加わるようにマロン派を説得しようと試みたものである[15]。この点（そして、ティモテオスが総大司教であった最初の２年間における彼の選出をめぐる論争）を参考にすると[16]、彼が書簡にあるような明確な言葉で自分の総大司教としての正当性を主張することは理解できる。彼はそれを奉仕者と聖職者という言葉で暗に言い表しているが、その少し前にバグダードに移されていたクテシフォン－セレウキアの総大司教の座に就くことの正当性を断固として宣言している[17]。しかしながら、彼の動機は政治的であるだけでなく、かなり布教目的でもあったように思われる；彼は、「この自立存在であるあのお方[18]・・・我々の代わりに十字架にかけられた人が・・・異なる、さまざまな土地や人種や言語で」と公言する際、自分自身が鍵となる人物であるとみなしていたことに疑いの余地はない。

ティモテオスはその一生をアラブのカリフ帝国〔アッバース朝〕の中心地で過ごし、そのため彼の総大司教の権威の下にある広大な領域のほとんどを

一度も訪れることはなかったが、世俗のものであろうが、教会に関するものであろうが、地上にあるどれよりも広大な管区を自分が管轄しているということをティモテオスはとても強く意識していた。彼はカリフの宮廷において信頼される人物であり、イスラーム教徒の支配下でもっとも大きなズィンミー dhimmi（訳註2）（「バベル」、ペルシア、アッシリアに住む人たち）の長であっただけではなかった；彼はまた、「この総大司教座の下」にあったイスラーム世界の外側の遠く離れた珍しい異国の土地も管轄していたのであって、そこにはインド人の土地（ベス・ヒンドゥワーイェー Beth Hinduwāyē）、中国人の土地（ベス・スィナーイェー Beth Ṣināyē）、チベット人の土地（ベス・トゥプターイェー Beth Tuptāyē）、トルコ人の土地（ベス・トゥルカーイェー Beth Ṭurkāyē）も含まれていた。これによって、アッバース朝のカリフの目には彼がかなりの威信と影響力をもつ者として映ったことは疑いない。

中国への東方教会の最初の布教は635年のことであり、これは中華王国 Middle Kingdom において数世紀にわたってシリア教会が存在することになる出発点であった。[19] そして、ティモテオスが総大司教であった781年には有名な西安の石碑〔大秦景教流行中国碑〕が建てられた。[20] 中国とインドの両方にキリスト教が存在することになったことを思い描きながら、彼は書簡XIII（795～798年、同じくセルギウス宛て）のなかで、ܣܓܝܐܐ ܕܡܢܙܪܐ ܕܡܬܝܐ ܕܒܝܬ ܣܝܢܝܐ ܕܒܝܬ ܗܢܕܘܝܐ ܕܒܝܬ ܬܘܪܟܝܐ ܕܒܝܬ ܬܘܦܬܝܐ ܕܒܝܬ ܗܢܕܘܝܐ ܕܒܝܬ ܣܝܢܝܐ「多くの修道士たちはたった1つの牧杖とたった1つの頭陀袋を携えて海を渡りベス・ヒンドゥワーイェーとベス・スィナーイェーに行った」[22] と書いた。そして、同じ書簡の中で、彼は ܡܪܝ ܕܒܝܬ ܣܝܢܝܐ「ベス・スィナーイェーの首都大司教」の死について述べている。[23] マルガのトマス Thomas of Marga の『Book of Governors〔支配者たちの書〕』（850年頃）によると、「マール・ティモテオス Mar Timothy の書簡」では、おそらくこの亡くなった首都大司教の後継者である ܕܘܝܕ ܡܪܝܢ ܕܒܝܬ ܣܝܢܝܐ「ベス・スィナーイェーの首都大司教、ダヴィド David」の選出についてもふれられている。[24]

書簡XLIとXLVIIは２つともチベット人（ܕܒܝܬ ܬܘܦܬܝܐ）とテュルク人（ܬܘܪܟܝܐ ܕܒܝܬ）を一つにつなげている。８、９世紀の間、チベット帝国は中央アジアと中国の両方において大きな勢力となっていた。[25] 書簡XLVIIにおけるベス・トゥプターイェーの首都大司教がすぐにも任命されるとするティモテオスの謎めいた言葉は、その帝国内にキリスト教がわずかな間存在したことについて情報を与えてくれるが、それ以上のものではなく歯がゆい感じがする。[26] Jean Dauvillier は、ティモテオスが総大主教になる前に、それ〔キリスト教〕はすでに存在していたと結論付けたが、[27] わたしたちはこの謎に包まれた首都大司教座についてはそれ以上何も知らないし、この当時のチベットにおけるキリスト教に関して残っている証拠はあったとしてもごくわずかである。[28]

テュルク人のキリスト教への改宗

ティモテオスが言っているテュルク人の改宗の年代ははっきりしない。それは一つには文章を構成する文法が舌足らずであるからで、そこにある「我々の時代」や「10年［前］」、「13年［前］」のような表現は曖昧なのである。このテキストを最初に翻訳した Jerome Labourt は、書簡が書かれたのとほぼ同じ頃の792年に改宗が起こったと理解した。[29] ほかの大部分の人たちは、（ティモテオスの書簡すべての年代を特定した）Raphaël Bidawid を含め、それより10年早い、782/83年に年代比定した。[30] その文章の文法は、書簡が書かれた10年から13年前の間に改宗が起こったということを示しているように思われる。「13年［前］」はおそらく780年のティモテオスの就任を指しており、「10年［前］」はおそらく、781/82年に開催された教会会議においてすべての司教が彼を正式な総大司教であると認めた後に彼の権威が強化されたときを指している。このように、「我々の時代」における改宗とは780年から783年の間にどこかで起こったのだろう。

1214年の段階で著述していたマリ・イブン・スライマーン Mari ibn Sulaymānは、ティモテオス自身が「テュルク人の王、可汗」（خاقان ملك الترك）を入信させたとしている。[31] しかしながら、ティモテオスの書簡は、彼が自分でその王を改宗させたと言っているのではなく、たんに後者〔可汗〕が「メシアの偉大な力の働きによってキリスト教についての知識を持つようになった」と言っているにすぎない。実際のところ、書簡のやり取りを通して可汗が入信したのでなければ、ティモテオスがどのようにして彼〔可

汗〕を信仰に導いたのか分からない。というのもこの２人が会ったことを示す証拠はないからである。シリア語とキリスト教アラビア語の文献に記されているほかの２つの類似した出来事は、中央アジアにあったテュルク人の中心地に近い所の教会組織内の誰か、あるいはシルクロード沿いで交易を行っていた商人集団の一員たちか、そのどちらかによって改宗が進められた可能性が高いことを示している。

ティモテオスが言っている入信は、テュルク人のキリスト教改宗のなかでは、３つあったうちの２番目のものである。[32] 1番目の改宗は『Khuzistan Chronicle〔フーズィスターン年代記〕』（660 ～ 680年頃）において報告されているが、その文献は（シリア語テキストを最初に出版した Ignazio Guidi にちなんで）[33]『Guidi Chronicle〔グイディ年代記〕』、もしくは『Anonymous East Syrian Chronicle〔作者不明の東シリア語年代記〕』としても知られているものである。名前が知られていない著者はそのなかで、「メルヴ Merv の首都大司教であるエリア Elia がトゥルカーイェーとそのほかの民族から数多くの人たちを門弟にした」ことを伝えている。年代は伝えられていないが、研究者たちは通常それを644年に比定している。[34]

その部分は『Khuzistan Chronicle』の終わりに置かれているが、「（メルヴの）向こうの境界地域の外側の」どこかを旅していたとき、エリアが「そこの小王[35]が別の王と戦うために出かけるところに出くわした」ときの様子を詳細に記している。その小王はエリアに対して「私が信じる神々に仕える神官［シャーマン］たちがするように、［お前の神も超自然的なことができる］証拠を示す」ように求めた。続いてテュルク人の「神官たち」が天気の魔術に取り掛かると、「天が雲と風でどんよりとし、雷鳴と稲妻が始まった... するとエリアは聖なる神の力を振るって〔空中に〕天なる十字架の印を出現させ、抗う悪魔が作り出した幻覚を静めた。[訳註3] すると一瞬にしてすべてが消え失せた。そののちその小王は、祝福されたエリアが行なったことを見て、平伏し、彼〔エリア〕の前で拝礼した。そして、彼〔小王〕は〔キリスト教を〕信じ、彼のすべての兵士たち〔も信じた〕。そして、彼［エリア］は彼らを川に行かせ、全員に洗礼を施し、彼らのために司祭や助祭を任命し、自分の地〔メルヴ〕に戻った」。[36]

３番目の改宗はアラブ人キリスト教徒の著述家であるマリ・イブン・スライマーンの『Kitāb al Majdal〔キターブ・アル-マジダル〕（『Book of the Tower〔塔の書〕』）』（1214年）[37] やバル・エブローヨー Bar ʻEbroyo の『Chronicon Ecclesiasticum〔教会年代記〕』（1286年）[38] に詳しく記されており、両者とも、また別のメルヴの首都大司教であるアブディーショー ʻAbdishoに依っている。[39] バル・エブローヨーは、自身の著書『Chronicon Syriacum〔シリア年代記〕』（1286年）で、ヒジュラ暦398年（西暦1007/08年）に起きたとされているその事件について以下のように要約している：「そして、その年、東方の内陸部の［あるいは遠方の］トゥルカーイェー Turkāyē の部族のうちのある1つ、その部族はケレイト Kerait と呼ばれるのだが、その部族がメシア〔イエス〕を信仰することになった。そして、彼らは彼らの王に起きた奇跡によって［キリスト教の］信奉者になり、洗礼を受けた」。[40]『Chronicon Ecclesiasticum〔教会年代記〕』にあるバル・エブローヨーによるさらに詳しい記事では、とりわけ次のように伝えている：彼［王］は狩猟中に山のなかで道に迷ったが、聖人が幻となって彼〔の前〕に現れ、野営地に戻る道を示してもらった。「彼［王］は無事に自分の幕帳に戻った時、そこに居合わせたキリスト教徒の商人たちを呼び、彼らと信仰について話し合った」。[41]

そのようなわけで、ティモテオスの記事にある王の改宗は、十中八九、中央アジアのシリア正教会教徒 Syriac Christians、おそらく司教か首都大司教、もしくはよりありそうなのはキリスト教徒の商人との接触によるものであろう。しかしながら、それ以前のテュルク人の小王の改宗やその後に起こったケレイトの改宗とは異なり、とりわけその改宗が782/83年に起こったのであれば、メルヴの首都大司教がこの改宗に関わっていたということはありそうもない。というのは、ティモテオスの総大司教選出は当該の地位に〔メルヴの首都大司教〕あった現職者であるヨセフ Joseph によって強力に反対されていたからである。ティモテオスは、彼を退位させ交代させたが、彼〔ヨセフ〕の後継者であるグレゴリー Gregory は、布教活動よりも［メルヴの］首都大司教座を安定させることの方に関心があったようだ。

むしろすでにサマルカンドに首都大司教座があったのだから、そこからキリスト教徒の伝道師あるいは商人がこれらのテュルク人と接触していたのであろう。それ〔サマルカンドの首都大司教座〕が創設

されたのは、イブン・アッ-ターイブ Ibn at-Tayyib（1043年没）によれば、イショーヤフブ Isho'yahb が総大司教座にあったときであったと言い――そのイショーヤフブはイショーヤフブ1世 Isho'yahb I（582～596年）、あるいはイショーヤフブ２世 Isho'yahb Ⅱ（628～646年）、イショーヤフブ３世 Isho'yahb Ⅲ（650～658年）のことだとする――、一方またアブディーショー・バル・ベリハ 'Abdisho bar Berikha の『Nomocanon〔教会法〕』（1290年）によれば、サリーバ-ザハ Ṣaliba-Zakha（714～728年）が総大司教座にあったときであったと言う。アブディーショーはまた、その創設が総大司教アハイ Ahai（410～414年）あるいはスィラス Silas（503～523年）によるものだとする人たちもいるとしている。[42] ずっとより近くにいたエフタルは550年頃まで司教でさえ受け入れていなかったのだから、5世紀か6世紀にサマルカンドの首都大司教が存在していた可能性はとても低いが、７世紀か８世紀の年代は確かにありそうである。[43]

ティモテオスの書簡におけるテュルク人の同定

ティモテオスが書き記した改宗は、それより150年前にメルヴのエリアが行った改宗よりもはるかに大規模なものであった。それに関わった支配者は、ܡܠܟܐ「小王」ではなくܡܠܟܐ「王」であり、彼の軍勢だけでなく「おおよそ彼の領土のすべて」が彼に倣っている。ティモテオスが記しているテュルク人というのがどの部族であったかは、ほぼ１世紀にわたって推論の対象となってきた。François Nau は、これはカシュガル Kashgar やアルマリク Almaliq の首都大司教座の起源となったものであると言っている。[44] しかしながら、これはほとんどあてずっぽうに過ぎない。なぜならアムル・イブン・マッタイ 'Amr ibn Mattai（1350年頃）によれば、カシュガルの首都大司教について私たちが手にしている最初の報告は、〔ティモテオスの時代の入信の〕4世紀も後の時代、総大司教エリア３世 Elia Ⅲ（1176～1190年）の時代であるからである。この同じアムル・イブン・マッタイはまた、彼の首都大司教座のリストの中でカシュガルの首都大司教座を كاشغر و نواكث（カシュガルとナヴェカス Navekath〔カーシュガル・ヴァ・ナヴァーカト Kāshghar va Navākat〕）という名の下に含めている。[45] アムルの同じリストにあるハーン-バーリクKhan-baliq〔大都〕とアル-ファーリクal-Faliq（خان بالق و الفالق〔ハーン-バーリク・ヴァ・アル-ファーリク Khān-bāliq va al-Fāliq〕）の首都大司教という名称に説明を加えて、これをアルマリクとするのはさらに問題である。[46] トゥルキスターン（تركستان〔Turkistān〕）の首都大司教は、アムルのリストにあり、以下でも議論されるが、そちらをティモテオスによって設立された首都大司教座に比定するほうがより可能性が高いだろう。

それとは対照的に、Paul Pelliot は、テュルク人の首都大司教は、サマルカンドの首都大司教のように固定された司教管区を持っていなかったのではないかとした。遊牧民に属していることから、むしろチャチ Chach（タシュケント Tashkent）の北東約250kmに位置しているシル・ダリヤ川沿いの都市オトラル Otrar を「centre de gravité〔重心〕」として移動していた〔とPelliotは考えた〕。[47] これはあり得ることであり、それと同じことはそれよりは前の時代にエフタル人のために設置された司教管区でもあったのかもしれないのだが、Pelliot はなぜオトラルと考えたのか明確な理由を示していない上に、オトラルにおけるキリスト教に関する文献的あるいは考古学的な証拠は存在しない。最後になるが、Annemarie von Gabain は、問題となっているその支配者はウイグル人の可汗 qaghan であった可能性を示唆したが、この点については下で考察することにする。[48]

問題の改宗が起こったのが782/83年であろうと792/93年であろうと、それは、ウイグル Uighur、カルルク Qarluq、そしてバスミル Basmil 勢力の連合体が742年に第二突厥可汗国を倒し、同じくモンゴルに拠点を置くウイグル可汗国が744年に取って代わった数十年後のことであった。その南のイリ川流域やソグディアナでは、テュルゲシュ Türgesh〔突騎施〕の支配（716～740年）は長続きせず当時すでに崩壊していた。そのテュルゲシュの生き残りの人たちは、766年までにはテュルク系のカルルク族に服属していた。[訳註4] このカルルク族が今やかつての西突厥の領土の大部分、とくにイェティ・ス Yeti Su〔ジェティ・ス Jeti Su〕、つまりセミレチエ（「７つの川」）地方を支配していた。[49] しかしながら742年から744年の間のウイグルとカルルクの当初の関係を反映して、ウイグルの支配者はカガンqaghan〔可汗〕と呼ばれた一方で、カルルクの支配者はより下位のヤブグ yabghu〔葉護〕（O.T. 𐱅𐰇𐰼𐰚𐰇）という称号を用いた。[50]

この問題を考える上でおそらく重要になるのは、テュルク族の打ち立てたほかの２つの国が、この時代の主要な世界宗教に改宗したことである。762年後半あるいは763年前半、中国で安禄山 An-lu-shan の反乱の鎮圧を援助しているさなか、ウイグルの支配者ベグ・カガン Bögü Qaghan〔牟羽可汗〕（759～779年）は数名のソグド人マニ教徒に出会ってからマニ教に改宗した。都のカラバルガスン Karabalghasun に戻るやいなや、彼はそれ〔マニ教〕を自分の可汗国の公式な宗教〔国教〕であると宣言した。[51] いくつかのアラビア語文献によれば、それから間もなくしてハールーン・アッ-ラシード（786～809年）がカリフであった時期にハザール人の王はユダヤ教に改宗した。[52]

ウイグルはマニ教に改宗したのだから、当然ながらウイグルがティモテオスのトゥルカーイェーの候補となる可能性は排除される。もっとも von Gabain 自身はその論文で、キリスト教に改宗したその支配者は〔第4代の可汗になった〕アルプ・クトゥルグ・ビルガ・カガン Alp Qutlugh Bilgä Qaghan〔合骨咄禄毘伽可汗〕（トゥン・バガ Tun bagha〔頓莫賀達干〕、779～789年）であったとしている。[53] 彼は自分のいとこであるベグ・カガンを殺害し、権力を乗っ取り、反ソグド人および反マニ教政策の時代を開いたのは事実だが、これはおそらく「テュルク民族の生来の信仰〔シャマニズム〕に回帰した」こと以上のことは意味していないのであろう。[54] イスラーム教徒の地理や歴史の記録は一致して、マニ教が当時のウイグル人（アラブ人の記録では、トクズ・オグズ Toquz Oghuz と呼ばれている）の主要な信仰であったとしている。[55] その後継である天山ウイグル王国 Uighur Kingdom of Qocho〔西ウイグル王国〕（860年頃～1284年）におけるキリスト教に関する証拠は豊富にあるが、[56] ウイグル可汗国でも西ウイグル王国でもウイグルの支配者がキリスト教に改宗したという記録は存在しない。ガルディーズィー Gardizi（1050年頃）ははっきりと「トグズ・オグズ・ハーガーン Toğuz Oğuz Xāqān の宗教は従来からマニ教であるが、そこの都や領土にはキリスト教徒［タルサー tarsā］がいる」と記している。[57]

古代テュルク語碑文や８、９世紀のイスラーム教徒の著述家たちにが言及しているほかの中央アジアのテュルク族には、バスミル、ハラジュ Khalaj、キメク Kimek、キルギズ Kirghiz、オグズ、ペチェネグ Pecheneg、カルルク、キプチャク Qipchaq、テュルゲシュが含まれている。[58] これらのうち、バスミル、キメク、ペチェネグ、[59] テュルゲシュにおけるキリスト教に関して私たちは何もわかっていないが、オグズ、キルギズ、キプチャク、ハラジュ、そしてカルルクとキリスト教が関係していたことについては、確実ないしはその可能性がある。

オグズの初期の歴史をたどることは非常に難しい；部族名は８世紀のオルホントルコ語碑文とウイグル語碑文（O.T. ԓԓϒ）に出てくるが、その単語自体は基本的に「部族、部族連合」を意味するので、指示する対象は必ずしも明白ではない。[60] 後の時代にオグズ Oghuz（Ar. غز、グッズ Ghuzz）として知られている集団に関するもっとも古い記事はバラーズリー Baladhuri（892年没）のなかに現れる。それはアル-ムッタスィム al-Mu‘tasim（833～842年）がカリフであった時期の出来事に関連しており、[61] ティモテオスの後の時代のことであって、問題となっている改宗にはすでに遅すぎる。しかもその時点ですら彼らの間におけるキリスト教に関する記録は何もない。

Daniel Chwolsonは、そしてWilhelm Barthold[62]も彼の考えに従っているのだが、オグズの指導者であるセルジューク Seljük（1009年没）の息子—ܡܝܟܐܝܠ: ܡܝܟܐܝܠ（ܬܒܓܘ؟）: ܡܘܣܐ: ܐܪܣܠܢ、「ミカエル Michael、ヤブグ Yabghu［あるいはパイグPayghuか］、モーゼス Moses とアルスラン Arslan」[63]—の〔うち〕2人が聖書にある人名を持っていたというバル・エブローヨー（1286年）によって記録されている事実を重要視した。[訳註5] しかし、このことはキリスト教との関係よりもむしろ、セルジュークや彼の戦士たちが仕えていたユダヤ教の信者であるハザール・カガンJewish Khazar qaghan からの影響を示唆しているだろう。［オグズとキリスト教の関連として］これよりさらに具体的な記述は、Barthold が指摘しているのだが、ペルシア人の著述家であるガズウィーニー Qazwini（1283/84年没）が行っており、彼はオグズについて、「彼らはサンジャル・イブン・マリクシャー Sanjar ibn Malikshah［1118～1157年］の時代までセルジューク朝のスルターンと同盟していたキリスト教徒である」と述べている。ビールーニー Biruni［1000年頃］の報告に基づいて、ガズウィーニーは、キメクの土地にある泉に関して、そこには「人間の片足の痕跡、その人間の両手の指を含む手のひらの痕跡、まるで

その人が跪いているかのような膝の痕跡、そして少年の両足の痕跡、一匹のロバの蹄の痕跡がついた岩がある。グッズ族のテュルク人 Ghuzz Turks はその岩を見るとその前に跪くが、それは彼らがキリスト教徒であり、それがイエス・キリストのものであると考えているからである」と記している。[64] この話は草原地帯に住む民族の間におけるキリスト教の歴史と無関係ではないが、問題となっている改宗のずっと後のことであり、ティモテオスの書簡に反映されているような、明確に規定された教会組織をともなうより組織的な信仰形態というより、むしろキリスト教に関する口伝えの伝承が、テュルク人のシャマニズムの儀礼に組み入れられたことを反映しているように見える。

かなり乏しいデータにしか基づいていないのだが、Anatoly Khazanov は「キルギズ人 Qirghiz の貴族の一部はマニ教に改宗したものの、キリスト教はキルギズ人に浸透した」のではないかとしている。[65] しかしながら、キルギズ族の男性が建てた古代ウイグル語の碑文には、突厥文字の𐰺𐰞を使ってシリア語の ܡܪܝ (mar)、つまり「首領、主人」を表す事例がみられるが、それはほぼ確実にマニ教の導師に言及したもので、キリスト教の導師ではない。[66] キルギズ人の口承の叙事詩である『マナス Manas』には、ペルシア語でキリスト教徒を表すタルサーは確かに見られるのだが、それらはより詳しく分析する必要がある。また、口承の叙事詩というものが時とともに発展することを勘案すれば、それらをどれほど古くにまでたどることができるかは不明である。[67] [68] 8世紀の終わり頃にはキルギズ人はウイグル人に服属していたのだから、彼らがティモテオスの言うテュルク人であるということはあり得ない。たとえ実際に「ネストリウス派キリスト教がキルギズ人の間に広まった」としても、そのことは、Sergey Klyashtorny が断言しているように、彼らがウイグル人から権力を奪い取った後の時代である9世紀半ばまでは起きなかったはずである。[69]

キプチャク・テュルク人（西洋の文献ではクマン人 Cumanとして知られる）のあいだのキリスト教信仰は、マルヴァズィー Marvazi（1120年頃）やシリアのミカエル Michael the Syrian（1195年）を含む後代のさまざまな権威たちが証言しているところである。マルヴァズィーは次のように述べている、「クーン Qūn たち［キプチャク部族連合の一部］は... キターイ Qitāy［中国］の地からきた... 彼らはネストリウス派キリスト教徒で［あった］、牧草地がなくて困って、彼らの居住地から移住してきた」と説明している。[70] 同じように、ミカエルはクマナーイェー Qumanāyē について、中央アジアの中心部から「ギリシア人の王国の国境」の北にまで移動したことを記したのち、「彼らの習俗は混乱してはいるものの、今の場所にいるキリスト教徒たちの国民を大いに支持している」と指摘している。[71] しかしながら、12世紀と13世紀にギリシア正教会 Orthodox あるいは（ジョージア、ロシア、そしてハンガリーの）カトリック教会 Catholic Christianity に改宗したキプチャクの支配者に関する明確な証言はあるものの、彼らがいつネストリウス派キリスト教を受容したのかについての情報はなく、当然ながら8世紀に改宗した支配者に関する記録もなんら存在しない。[72]

アムル・イブン・マッタイによる首都大司教座の一覧表にある مطران حليج「ハリフ Ḥaliḥ の首都大司教」は、ある写本では خلج「ハラジュ Khalaj」と記されており、西トルキスタンとアフガニスタンに住んでいたハラジュ・テュルク人 Khalaj Turks を示しているのではないかとする憶測があった。[73] もしそうであるならば、これは遊牧民族に属する首都大司教のもう1つの例となるが、この謎めいた首都大司教座に言及する史料はほかにはない。そして、その同じアムルのリストにトゥルキスターンの首都大司教をあげているので、ティモテオスが言うテュルク人はハリフあるいはハラジュとは別のものということが示される。さらに、アブディーショー・バル・ベリハ（1315/16年）は、彼の首都大司教座のリストに ܚܠܘܢ ܘܒܝܬ ܒܝ ܣܟܠܝ「ハリフ Ḥaliḥ、つまりハルワン Ḥalwan とハマダン Hamadan」を含めており、アムルの〔リストの〕読みは実際のところحليح（ハリフḤaliḥ）であり、خلج（ハラジュ Khalaj）であるはずはないということが示されるのである。[74] この首都大司教座を西イランのハルワンとハマダンに比定すると、西トルキスタンやアフガニスタンのハラジュとの関係は明確に否定されることになる。

カルルク人

しかしながら、ティモテオスの書簡にあるトゥルカーイェーを、テュルク人のなかではカルルク人 Qarluq Turks に比定する十分な理由がある。そのカ

ルルク人もオルホンでみつかる突厥碑文やルーン文字ウイグル語碑文に現れている（トルコ・ルーン文字表記𐱅𐰇𐰼[75]）。もっとも説得力のある証拠はナルシャヒー Narshakhi の『History of Bukhara〔ブハラの歴史〕』（943/44年成立）のなかに見出され、〔以下のように〕記されている。ヒジュラ暦280年ムハッラム月（西暦893年３月/４月）、サーマーン朝のアミール・イスマーイール Amir Isma'il がタラーズ Ṭarāz に戦いに行き、そこで大きな困難に遭遇した。最終的にタラーズのアミール amīr は多くのディフカーン dihqān（地主階級）とともに出てきて、イスラーム教を受け入れた。タラーズはこのようにして征服された。大きな教会は大モスクに姿を変え、「信徒たちの司令官（カリフ）」のムウタディド・ビッラーフ Mu'tadid bi'llāh〔第16代アッバース朝カリフ〕の名でフトバ khuṭba（説教）が行われた[76]。

タバリー Ṭabari（923年没）は、イスマーイールが「テュルク人の土地」を襲撃し、彼らの都を征服し、「彼らの王やその妻ハートゥーン Khātūn」を捕虜にしたことについて述べている[77]。これは、マスウーディー Mas'udi（956年没）によってさらに裏付けられている。〔マスウーディーは〕そのテュルク人がハルルヒヤ Kharlukhiyya であったと述べているが、〔この語は〕アラビア語でカルルク Qarluq を表す[78]。バル・エブローヨーもまたこの出来事について記しているが、それはタバリーからの引用においてである。後者〔タバリー〕は、このテュルク人がキリスト教徒であったとは言っていないので、バル・エブローヨーもそのことについては語らない[79]。

タラーズ（さまざまな時代にはタラス Talas としても知られる）はチャチ（タシュケント）の北東300キロメートルに位置しており、カルルクの冬の都であった[80]。そこの教会が「大モスク」に改変できるほど大きかったという事実は、それ〔教会〕が、首都大司教のいる教会ではなかったとしても、少なくとも司教がいた場所で、大聖堂であったことを示しているのだろう。Dauvillier はタラス／タラーズの教会がモスクに改変されたことに関して、タラスやブハラ Bukhara にあった教会はオトラルに中心を置いていたと推定される首都大司教座に従属していたのではないかと考えたが、それに関する証拠は何も示していない[81]。しかし首都大司教座はタラス／タラーズそのものにあった可能性がずっと高いように思われる。ブハラについて言えば、そこでも教会がモスクに改変されたという情報はあるのだが[82]、それ〔ブハラの教会〕はおそらくサマルカンドの首都大司教に従属していたと考えられる。というのは〔ブハラとサマルカンドの〕両都市はサーマーン朝の領土のなかにあったからである[83]。

カラハン朝は943年頃にカシュガルで樹立され、その支配者サトゥク・ブグラ・ハーン Satuq Bughra Khan は955年頃にイスラーム教に改宗したが、現在では、一般的にカラハン朝はカルルク人に起源すると信じられている[84]。ヒジュラ暦349年（西暦960/61年）に「200,000帳ものテュルク人が」イスラーム教を受容したと、—これはおそらくカルルク族のことを言っているようだが—イブン・ミスカワイフ Ibn Miskawayh（1030年没）[85]や後の時代のイブン・アル-アスィール Ibn al-Athir（1233年没）が報告しているが、この〔時点で彼らのイスラーム教受容の〕プロセスは完了したようである。これは、バル・エブローヨーが西暦1007/08年にキリスト教へ改宗したと記している200,000のケレイト人との不思議な鏡像関係にあり[86]、おそらくティモテオスの書簡で記されているのと同じプロセスをともなっていた。というのもそこでも「彼のおおよそすべての領土」が支配者に従ったとあるからである。

もしティモテオスのトゥルカーイェーがカルルク人であり、カルルク人がその後1世紀以上にわたり（イスマーイール・イブン・アフマド Isma'il ibn Aḥmad〔イスマーイール・サーマーニー〕が彼らを打ち破るまで）キリスト教国の支配者だったのであれば、そのことは、カシュガルに首都大司教座がその後の1176～1190年の時期に設置されたという、上述したことがらを説明する助けになるかもしれない。実際のところ、先行する時代のキリスト教王朝〔カルルク〕と後の時代のイスラーム教国カラハン朝のつながりはきわめて直接的なものであったのかもしれない。そのことは Peter B. Golden が次のように言っていることからも示唆されよう：「イスマーイール・サーマーニー Ismā'il Sāmānī がタラーズ Ṭarāz で戦った敵［であったカルルク人］はビルゲ・キュル・カディル・ハン Bilge Kül Kadïr Khan の息子であるオグルチャク・カディル・ハン Oghulchak Kadïr Khan だったかもしれない... この敗北（893年）はおそらく、彼がカシュガル地域へ撤退した原因であった... カラハン朝の王子であるサトゥク（おそらくオグルチャク・カディル・ハンの息子か

甥）がイスラーム教に改宗したのはここ〔カシュガル〕であった」。[87] カシュガルは東カラハン朝（これは1041/42年に西の可汗国〔西カラハン朝〕から公式に分離したもの）にとって重要な中心地であったため、支配した王朝がかつてのキリスト教国であったという記憶が、おそらく東方教会がその地に首都大司教座を設立するのに好都合な状況を提供したのであろう。

文献と考古学による裏付け

この地域でのイスラーム教への改宗の過程は、多くの場合キリスト教からの改宗であるが、ホジャ・アフマド・ヤサヴィー Khoja Ahmad Yassavi（1166年）が中央アジアで設立したスーフィー Sufi のタリーカ tariqah[訳註6] のなかで広まった伝説にもおそらく反映されている。これらの伝説では、カリフ・アリー ‘Ali の子孫がイスラーム教を中央アジアにひろめるために遂行した聖戦が物語られており、その際に彼らはウズガンド Uzgand（ウズゲン Uzgen、キルギズスタン）、フェルガナ Ferghana、チャチ（タシュケント）、イスフィージャーブ Isfijab（サイラム Sayram、カザフスタン）、カシュガルおよびほかのいくつかの都市で、ترسالر（タルサーラル tarsālar）つまり「キリスト教徒たち」と戦ったという。

そのなかにはカシュガルの支配者についてとりわけ興味深いことが語られている：「〔彼は〕キリスト教徒であった；彼はミュンギュズリク・アク・カラハーン Müngüzliq Aq Qarakhān と呼ばれているが、彼にはユハンナーン Yuhannān［シリア教会の教徒の間ではありふれた名前］というキリスト教徒の名前が授けられている」。そしてまた興味深いことにタラス／タラーズ近郊の城塞都市、カルガリク Qarghalïq における「ゾロアスター教徒 Magian やキリスト教徒のイスラーム教」への改宗についても語られている。ここで語られていることの歴史的信憑性は、De Weese が指摘するように非常に疑わしいが、このテキストにおいてキリスト教徒が頻繁に取り上げられていることが、歴史的な事実をある程度反映していることは確実である。[88]

８世紀から９世紀頃のカルルクの領土の中心であったイェティ・ス地域（現在のキルギズスタン北部とカザフスタン南部）においては、キリスト教が存在したことを示す重要な考古学的証拠もある。タラーズそのものでは、キリスト教徒のさまざまな人工遺物が見つかっている。それらに含まれるのは、ペテロ Peter やガブリエル Gabriel の名前が記されたシリア語の碑文、[89] 十字架が描かれた複数のオッスアリ〔納骨器〕、[90] 十字架が描かれた土製の容器〔土器〕の破片、[91] 異論はあるものの教会であると従来認定されてきた建造物である。[92]

そのほかの人工遺物は、クラスナヤ・レーチカ Krasnaya Rechka（中世のサリグ Saryg）やアク・ベシム Aq-Beshim（中世のスイヤブ Suyab）、さらにかつてカルルクの支配下にあったキルギズスタン北部のさまざまなほかの場所で発掘されている。[93] わけても２つの教会が、部分的にではあるがアク・ベシムで発掘されているのである。少なくともそのうちの１つ（もしかしたら両方とも）は８世紀のものである可能性がある。[94] 最後に、アク・ベシムの近くにあるトクマク Tokmak とブラナ Buranaでは、13世紀から14世紀に比定される数百ものキリスト教徒の墓石が1880年代に発見された。[95] おそらく、モンゴルの支配によって比較的に大規模な宗教面での寛容さがもたらされたとき、ここにキリスト教がそれ以前に存在していたおかげで、その信仰がふたたび盛んになることができたのであろう。

改宗の動機や要因

宗教をとりかえることは、とくに支配者が関わっている場合は複雑な事象となる。[96] そのため、ティモテオスが伝える改宗の政治的な側面は過小評価されるべきでない。テュルク人の王がキリスト教を採択する理由はもしかしたら個人的なもので、精神的な理由さえあったのかもしれないが、戦略的な要因もおそらく関係していた。Khazanov が指摘しているように、遊牧民社会の支配者や貴族たちは、「政治的な状況のなかで生じつつある変化、それにあわせた調整や再調整の新たな可能性や必要性でさえ」よく理解していた。[97] カルルクのヤブグは、マニ教が彼らの北方にいるウイグル人の国教であることをとても意識していたのであろう。おそらく彼は、彼らの西方にいるハザール人の間でユダヤ教のステータスが高まりつつあるという情報も得ていたのだろう。ほかの2人のテュルク人支配者は可汗であり彼〔カルルクのヤブグ〕よりも高いステータスを持っていたのだが、カルルクのヤブグの方は、彼が世界宗教

を受容することで遊牧民の世界における彼の威厳が増すであろうと考えていたとしてもおかしくない。[訳註7)]

Khazanov は、ハザール人のユダヤ教への改宗が、「競合も共同もする相手でもあった２つの大国、つまりイスラーム教のカリフ帝国とキリスト教のビザンチン帝国からの... 政治的かつイデオロギー的な独立の表明」であったと論じている。ユダヤ教を採択することによって、ハザール人は、自分たちの国をユダヤ人の商人や学者、職人に対して開くということだけでなく、南方のどちらの帝国からも同化させられたり、征服されたりしないという強力で政治的な言明を行った。[98)] 同じように、ウイグルのマニ教への改宗は、「イデオロギー的な独立の宣言」であるとともに、中国によるマニ教の禁止令をやめさせるというウイグルの要求に見られるような「政治的な影響力の示威行為」ともなっていた。[99)・訳註8)] さらに、ウイグルがマニ教国家になることは明らかにマニ教徒のソグド商人、学者、職人たちへのアピールとなり、その結果、その後ソグド人たちがウイグルに存在したことが、ウイグル人たちの文化的向上において大きな役割を果たした。[100)]

カルルクのヤブグがキリスト教に改宗したときには、似たような動機が影響していたのかもしれない。すでにタラス河畔の戦い（751年）で中国とウイグル人に対抗してアラブ人と同盟を結んでいるのだから、カルルクがカリフ国における代表的な宗教とのつながりを求めることは当然であった。[訳註9)] 中央アジアにおけるジハード〔聖戦〕のかなり苛烈な歴史があったことによって、おそらくイスラーム教を採択するという考えは排除された。[訳註10)] しかしながら、キリスト教はカルルクに対してそのような軍事的（あるいは税を課されるという）脅威を与えることは一切なかった。ティモテオスは、その支配者との往復書簡のなかで何を伝えたかについては述べていないものの、後者〔テュルク人の王〕はアッバース朝の宮廷における東方シリア教会の総大司教の地位やその管轄する地域の広がりを間違いなく認識するようになっていた。ティモテオスとしては、あらゆる機会を利用してこれらのことをテュルク人の王に印象付けた。それに加えて、ハザール人やウイグル人の場合と同様に、テュルク人の王がキリスト教に改宗することによって、さらに多くのキリスト教徒のソグド人商人、学者、職人たちによるカルルクの領域への訪問や移住までもが促進されたことであろう。キリスト教改宗の背景を考察する上で最後に、８世紀末と９世紀初め、ウイグルと中国に対抗してカルルク－チベット同盟ができたことについても注意を払うことができるかもしれない。それはまさしくティモテオスがこれらの国に首都大司教を任命しようとしていたとき〔のことなのである〕。おそらくティモテオスの「総大司教座」と彼ら〔カルルクとチベット〕との相互的な関係が、彼らの政治的な結び付きを進展させる役割を果たしていた（もしくは逆に、後者〔カルルクとチベットとの政治的な結びつき〕が前者〔ティモテオスの「総大司教座」とカルルクとチベットとの相互的な関係〕を促進させたのかもしれない）。

550年頃のエフタルの例に習って、テュルク人の王は自らの民のために首都大司教の任命を要請した。改宗と最初の首都大司教の任命の要請（もしくは、実際的な任命）との間にどれくらいの時が経ったかははっきりしない。ティモテオスが彼の「諸書面（ܟܬܒܐ）」と述べていることから、おそらく通信の過程でシリア語と古代テュルク語（もしくはソグド語）の間で翻訳されたうえで、ある程度の量の往復書簡がその２人の間でやり取りされたことが示唆される。[101)]

とくに興味深いのは、テュルク人の王が「自分の王国の領土の首都大司教を任命するやりかた」についての説明を求めていることである。その文章［の「任命する」という動詞の人称］は三人称で書かれており、首都大司教の任命をティモテオスの手に委ねるというよりも、むしろ王自身が首都大司教を任命することを望んでいたということが示されている。もし最初に首都大司教の任命を要請してからかなりの時が経っていたのであれば、おそらく彼はしびれを切らし、自分でその役目を果たすことを望んだであろう。さらに、彼は自分がサマルカンドの首都大司教の権威下に置かれることは望まなかったであろう。というのは、サマルカンドはイスラーム教国であるサーマーン朝の領域内に位置していたからである。自分自身の首都大司教を持ち、その首都大司教が自分の領土内に置かれることが是非とも必要であった。改宗の1世紀のち、サーマーン朝がカルルクを征服したことは、改宗に際して後者〔カルルク〕が前者〔サーマーン朝〕からの独立を維持することが必要であったことを明確に示している。[102)]

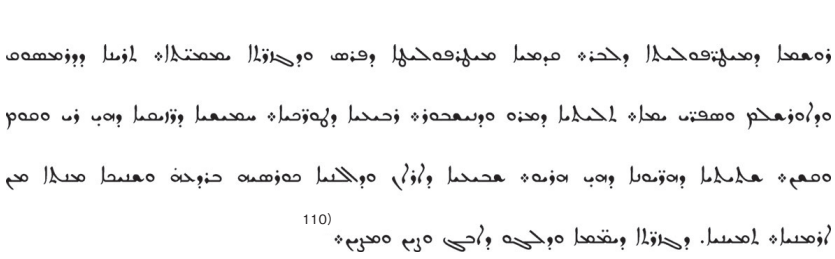
ヒジュラ暦195年（西暦810/11年）において、ホラー

サーン Khorasan の総督であり、のちのカリフでもあるアル-マアムーン al-Ma'mun の感想がタバリーに引用されていて、その文章のなかにもテュルク人の王の独立に対するこの強い望みが見てとれる：「ジャブグーヤ Jabghūyah は服従することをやめた；チベットの支配者である可汗 Khāqān は暴れ回っている、・・・私にはこれらの事柄のたった１つもままならない」[103]。Barthold は、「ジャブグーヤ」を正しくカルルク人のヤブグ yabghu だとしている[104]。問題の２人の支配者たちがこれのすぐ前に「ネストリウス派」の首都大司教を手に入れていて、それが今やカリフに対して厄介事を起こしているのはおそらく偶然ではない。

書簡XLIにおける「これもまた、我々がなしたことである」というティモテオスの言葉に基づけば、最初の首都大司教はおそらく792/93年頃のある時期に選出された。書簡XLVIIにおける「聖霊は最近になり、ベス・トゥルカーイェーの首都大司教を任命した」というティモテオスの言葉は、それより後の時代の首都大司教に関してというより、ほぼ間違いなく同じ出来事のことを言っているのである[105]。東方教会の聖職者がそれに先だって彼〔テュルク人の王〕の民のなかにいたのであろうか、あるいはこれが教会組織との彼らの最初の接触であったのでろうか。この150年前にメルヴのエリアが小王のために任命した司祭や助祭たちが、中央アジアのテュルク人の間に〔キリスト教が〕存在することになる始まりで、それがティモテオスの時代まで続いたかどうかについて知る由はない。よりありそうなのは、すでに示唆したように、テュルク人たちがそれ以前に聖職者と接触したとすれば、それはおそらくすべてサマルカンドの首都大司教座を代表する人たちとの接触であったのであろう。

追記

ティモテオスがテュルク人のために設置した首都大司教座が、893年のサーマーン朝による征服を越えて続いたのかということについて、どのような証拠があるのであろうか。東方教会の首都大司教座のリストはダマスカスのエリア・ジョウハリー Elia Jauhari、イブン･アッ -ターイブ、アブディーショー･バル・ベリハ、アムル・イブン・マッタイの諸著作のなかに見出すことができる[106]。エリアのリストは、たまたまタラス／タラーズがイスラーム教徒によって征服された年と同じ893年に編纂されたのだが、（サマル）ガンド（Samar）Qand州 هوفركيا قند[107]しか挙げていないが、それはイブン･アッ -ターイブ（1043年没）も同じである[108]。しかしながら、アブディーショーの『Order of Ecclesiastical Judgements〔教会法判定規則〕』（1315/16年）[109]には以下のテキストが含まれている。



外部地域の首都大司教たちについての記述。第１に、ペルシアと臨海の島々の首都大司教。第２に、ダマスカス、エルサレム、そして沿岸の首都大司教。第３に、メルヴ Mervとニーシャープール Nishapur の首都大司教。第４に、トゥルカーイェー Ṭurkāyē の首都大司教。第５に、ラズィカーイェー Raziqāyē[111]、すなわちライ Rayy、グム Qum、そしてガーシャーン Qashan の首都大司教。第６に、ヘラティアンス Heratians、すなわちヘラート Herat の首都大司教。第７に、アラン Aran とアラニア Alania の首都大司教。その首都大司教座はアルメニアの一部であるバルダア Barda'ah とシュニカ Shnika[112]である。第８に、諸海の島々の首都大司教とその向こう側にあるダバグ Dabag、スィン Ṣin、マスィン Maṣin の首都大司教。

これらの首都大司教たちは、カトリコス Chatolicos の選出に参加する権利を持っている６人の後にリストされている。このように、トゥルカーイェーの首都大司教は全体の10番目に位置付けられ

ている。[113] 最後になるが、1350年頃に執筆していたアムルは、彼のリストにおいてマトラーン・トゥルキスターン مطران تركستان（トゥルキスターンの首都大司教）を22番目に位置付けており、それはサマルカンドの首都大司教のすぐ後にある。[114] アブディーショーとアムルの両者は13世紀や14世紀の状況を反映させているが、その時代は、上述のイェティ・ス地方で発見された墓石によって証明されているように、キリスト教がトゥルキスターンで短期間ながらふたたび繁栄した時期である。しかしながら、この２名の著者によって記されているテルク／トゥルキスターン Turks/Turkistan の首都大司教座が、ティモテオスによって設立されたもの〔首都大司教座〕を継承しているものか、それともその後にあらたに設置されたものなのかは明らかでない。

ティモテオスの往復書簡におけるこれらの記録は簡潔ではあるが、中央アジアにおけるシリア教会のキリスト教の歴史を再建するという困難な課題にとってきわめて重要である。もし本当にカルルク・テルク人が、ティモテオスが総大司教であった時期にキリスト教に改宗した人たちであるならば、９世紀の大半の間、テルク人の世界のかなりの部分がキリスト教徒のオイクメネ〔居住領域〕の一部になっていたということになるのである。

註

1）この論文は、私の博士論文である「*Turkāyē*: Turkic Peoples in Syriac Literature Prior to the Seljüks（シリア語文献にみられるセルジューク族以前のテルク系の諸民族）」を基にしたものである。シリア語〔古典シリア語〕からの翻訳はすべて私自身が行なった。第1次資料のために用いられている略号は、論文の最後に一覧されている。テキストと翻訳のページ番号は斜線で区切って区別し、巻数はローマ数字で示した。原文と翻訳が別々に言及されている場合は、*Corpus Scriptorum Christianorum Orientalium*の慣例にしたがって、T（*textus*〔原文〕）とV（*versio*〔翻訳〕）で示した。註でテキストの原著と章番号を指定する場合には、ページ番号は丸かっこ内に示した（例：*Governors*, IV.20 (238/448) = Book of Governors 第4巻20章，原文238ページ，翻訳448ページ）。本論文ではパフラヴィー語表記用のアルダシールフォント Ardashir fontを使用させていただいたが、そのことでは Rastin Mehri 氏に感謝申し上げる。

2）この人物については、William Wright, *A Short History of Syriac Literature* (London, 1894) reprinted (Piscataway, New Jersey, 2001) pp. 191-194、さらに Anton Baumstark, *Geschichte der syrischen Literature mit Ausschluss der christlichpalastinensichen Texte* (Bonn, 1922), pp. 217-218 を参照。

3）一般的にネストリウス派教会 the Nestorian Church と呼ばれるが、それは誤りである。正式名称は聖使徒カトリック東方アッシリア教会〔アッシリア東方教会〕the Holy Apostolic Catholic Assyrian Church of the East である。

4）Oskar Braun, “Der Katholikos Timotheos I und seine Briefe”, *Oriens Christianus*, I (1901a), pp. 146-151; Hans Putnam, *L’Église et l’Islam sous Timothée I*, (Recherches publiées sous la direction de l’Institut de lettres orientales de Beyrouth, N. S. B. Orient chrétien, Tom III) (Beirut,1975), pp. 20–23 を参照。

5）Raphaël Bidawid, edited and translated, *Les lettres du partiarche nestorien Timothée I: étude critique avec en appendice la lettre de Timothée I aux moins du couvent de Mār Mārōn* (Studi e Testi 187) (Vatican, 1956), p. 74.

6）シリア正教会 the Syrian (or Syriac) Orthodox Church はシリアのキリスト教のもう一方の主要な宗派であり、ときには、ヤコブ・バラダエウス〔ブルドオーヨー〕Jacob Baradaeusにちなんで、軽蔑的にヤコブ派 the Jacobites と呼ばれることがある。ヤコブ・バラダエウスはビザンティン帝国公認のカルケドン派のキリスト論 the Chalcedonian Christology と対立するキリスト単性論者たち Monophysitesを組織化する功績があった6世紀のシリア人修道士である。

7）Bidawid, *Timothy*, pp. vi-vii. マロン派 the Maronites は、13世紀にローマ〔・カトリック教会〕と再統一したが，それは東方キリスト教に属する者たちでは最初であった。

8）Braun, 1901a, p. 150.

9）これらの書簡に関する論考については、G. Uray, “Tibet’s Connections with Nestorianism and Manicheism in the 8th-10th centuries”, *Contributions on Tibetan Language, History and Culture* (Vienna, 1983), pp. 400-404 を参照。

10）Timothy (Bidawid), XXXVI ܠ/117：Jerome Labourt, *De Timotheo I Nestorianorum Pariarcha (728–823) et Christianorum Orientalium condicione sub Chaliphis Abbasidis* (Paris, 1904a), p. 45.

11）Jessie Payne Smith, *A Compendious Syriac Dictionary, founded upon the Thesaurus Syriacus of R. Payne Smith* (Oxford, 1903), p. 43 を参照。シリア語の ܒܝܬ（*Beth*）という語には、「家、部屋、家族、国、人種、民族」を含む幅広い意味があり、地名とその土地に関係するものの両方を示すことができる。ܒܝܬ ܬܘܪܟܝܐ（*Beth Ṭurkāyē*）にあるように、ある民族名と組み合わさっているときは、民族集団かその領域のどちらを表しているのか文脈からでは不明なことが多いため、私はそれを翻訳しないままにしている。同じように、部族を示す語尾である-āyē をともなうテルク人の集団を表すシリア語の民族名（たとえば、*Ṭurkāyē* や *Qumanāyē*）も翻訳しないままにしてある。

12）*Timothy* (Bidawid), XLVI ܐ/ p. 124 : Labourt, 1904a, p. 43 : Alphonse Mingana, “The Early Spread of Christianity in Central Asia and the Far East: A New Document”, *Bulletin of the John Rylands Library*, Vol. 9, No. 2 (Manchester, 1925), p. 306.

13）*Timothy* (Bidawid), p.124にあるように、Labourt, 1904a, p.43は、これを *tredecim*〔13〕ではなく、*duodecim*〔12〕と訳した。

14）*Timothy* (Braun I), 308/309-311: Labourt, 1904a, p. 43, p. 45.

15）これは、ティエスラン枢機卿 Cardinal Tiesserant の言葉によれば、「un exposé de la foi nestorienne rédigé avec une intention missionnaire〔布教の意図をもって書かれたネストリウス派を信奉することの表明〕」［*Timothy* (Bidawid), p. vi］である。

16）*Timothy* (Bidawid), pp. 3-4; Wright, 1894, pp. 191–193.

17）これは、アッバース朝がバグダッドに都を設立した25年後、775年に起きたことである。訳註11)

18）シリア語の ܩܢܘܡܐ は「自立存在 hypostasis」、あるいは単に「人」のいずれかに訳すことが可能である［Payne Smith (1903), pp. 509-510］。ここではティモテオスは明らかに前者〔自立存在〕を意味しており、ギリシア語 ὑπόστᾶσις と同義である三位一体 Trinity の２番目の位格［神の子］を示している。

19）Ian Gillman and Hans-Joachim Klimkeit, *Christians in Asia before 1500* (Ann Arbor, 1999), pp. 265-305 を参照。私はここでは、インドにおける東方教会の歴史は考慮に入れていないが、それは Gillman and Klimkeit, 1999, pp. 155-202 に要約されている。

20）P. Y. Saeki, *The Nestorian Documents and Relics in China* (Tokyo, 1951), pp. 11-112 を参照。その石碑の作者〔景浄〕は、碑文が ܗܢܢܝܫܘ ܩܬܘܠܝܩܐ ܕܡܪܝܐ「ヘナニショ Ḥenanisho、カトリコス Catholicos、総大司教 Patriarch」の時代に建てられたと記録しているので、その1年前にヘナニショ Ḥenanisho II（775～780年）が死んだことについての情報は得ていなかったようである。

21）ܚܝܝܐ はまた、「独居者、世捨て人、隠者」も意味する (Payne Smith, 1903), p. 191。

22）*Timothy* (Braun II), 107/70.

23）*Timothy* (Braun II), 109/72.

24）*Governors*, IV.20 (238/448)。この書簡は残っていないようである。

25）これに関しては Christopher I. Beckwith, *The Tibetan Empire in Central Asia* (Princeton, 1987) を参照。

26）これに関しては Jean Dauvillier, *Histoire et institutions des Eglises orientales au Moyen Age* (London, 1983) の論文II-V および Uray, 1983 を参照。

27）Jean Dauvillier, “Les provinces Chaldéennes ‘de l’Extérieur’ au Moyen Age”, *Mélanges offerts au R. P. Ferdinand Cavallera*: pp. 260-316 (Toulouse, 1948), p. 292.

28）かつては、ラダック（北インド）にある大きな岩に刻まれたいくつかの「ネストリウス〔派〕」の十字架の近くで発見された1つのソグド語の碑文は、９世紀の半ばにサマルカンドからチベットの可汗 *qaghan* のところへ向かう途中のキリスト教徒のものである考えられていた。しかしその後、Nicholas Sims-Williams は、十字架とその地域にあるほかの1、2の碑文はキリスト教徒、おそらくはソグド商人がここを通過したことを示しているものの、問題の碑文の方は仏教徒によって書かれたものであることを明らかにした：Nicholas Sims-Williams, “The Sogdian Inscriptions of Ladakh” *Antiquities of Northern Pakistan: Reports and Studies (Rock Carvings and Inscriptions along the Karakorum Highway* vol. 2. Edited by Karl Jettmar (Mainz, 1993), pp. 151-163.

29）Jerome Labourt, *Le Christianisme dans l’Empire Perse sous la Dynastie Sassanide (224-632)*, (2nd ed.), (Paris, 1904b), p. 14.

30）*Timothy* (Bidawid), 80. Uray, 1983, p.402 の考察を参照。

31）*Majdal* I, ٧٣/64.

32）３つの改宗はすべて研究されている：Erica C. D. Hunter, “The conversion of the Kerait to Christianity in A.D. 1007” *Zentralasiatische Studien* Vol. 22. pp. 142-163 (1989/1991).

33）Ignazio Guidi, “Un nuovo testo siriaco sulla storia degli ultimi Sassanidi” *Actes de Huitième Congrés International des Orientalistes, tenu en 1889 à Stockholm et à Christiania, Section I: Semitique, Sous-section B*: pp. 3-36 (Leiden,1893).

34）この年代比定は、その話に先立って総大司教マル・アマ Patriarch Mar Ama（646 ～ 650年）の話があり、その〔話の〕後にイスラーム教徒の将軍ハーリド・イブン・アル-ワリド Khālid ibn al-Walid（642年没）に関する話が続くという事実に基づいている。しかしながら、Mihály Kmoskóは「マルウのエリア Elias of Marw の布教活動がアラブ人の征服に先立つのか、それともその後なのかを明確にすることはできない... このように、その出来事の正確な年代は決められない」と指摘している（Károly Czeglédy, “Monographs on Syriac and Muhammadan sources in the Literary Remains of M. Kmoskó” *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, Vol. 4. pp. 19-91(1954), p. 58を参照。この記述はMihály Kmoskó and Felföldi Szabolcs, *Szír írók a steppe népeiről [Syriac sources on the peoples of the steppe]* Vol. 20 (Budapest, 2004), pp. 143–144 に基づいている）。

35）シリア語ܡܠܟܐは「小君主」あるいは「小国の王」とも訳される。

36）*Khuzistan*, 34-35/28-29: Theodor Nöldeke, *Die von Guidi heausgegebene syrisch Chronik*, (Vienna, 1893), pp. 39-40: Mingana, 1925, pp. 305–306.

37）この年代は Wright, 1894, p. 255 に従う。研究者たちは現在、この著作の著者と書かれた年代の問題は当初考えられていたよりもさらに複雑であると考えている；Bénédicte Landron, *Chrétiens et Musulmans en Irak. Attitudes*

Nestoriennes vis-à-vis de l'Islam (Paris, 1994), pp. 99-108 を参照。

38）最新の学会の慣習に従って、私はバル・ヘブラエウス Bar Hebraeus ではなく、バル・エブローヨー Bar 'Ebroyo という呼び名を用いる。

39）*Chron. Eccl.* II, 279-281/280-282 : *B.O.* II, pp. 444-445:Mingana, 1925, pp. 308-311; *Majdal* I, ١١٢-١١٣/99-100. Chron. Eccl. の第２セクションはときとして第３巻と呼ばれることがあることに注意されたい。

40）*Chron. Syr*. 204/184。Hunter, 1989/1991が注記するように、改宗した集団が本当にケレイ Kerait 族であったのか、あるいはこれがバル・エブローヨーによって後に書き加えられた注釈であるのかについては問題がある。

41）*Chron. Eccl.* II, 279/280: Mingana, 1925, p. 309. Erica Hunter, "The Church of the East in Central Asia", *Bulletin of the John Rylands University Library*, Vol. 78, No. 3 (1996), p. 140 を参照。

42）*Ibn aṭ-Ṭayyib* VI.16 (II, 123); *Abdisho, Nom*., 304/141-142 : *B.O.* III.2, 426. なおここで典拠にしている２つの文献はどちらも、ヘラートと中国の首都大司教座 Metropolitanate がサマルカンドと同時に設立されたと述べている。

43）サマルカンドの首都大司教は、カトリコス・テオドシウス１世 Catholicos Theodosius I（アタナシウス Athanasius）（853 ～ 858年）の時代までには確かに確立されており、*Abdisho, Nom*., 308/146 に記録されているように、テオドシウス１世は首都大司教座のリストのなかでそれに言及している。総大司教マール・アバ Mar Aba がエフタル人（ܐܦܬܠܝܐ）のために司教を任命したことについては *Histoire*, 266-269 : Oskar Braun, 1915a, *Ausgewählte Akten persischer Märtyrer* (Bibliothek der Kirchenväter, Band 22), (Munich, 1915), pp. 217–218: Mingana (1925), pp. 304-305を参照。Mingana はその年代を549年としているが、Paul Peeters, "Observations sur la vie syriaque de Mar Aba, Catholicos de l' égkuse oerse (540–552)" *Miscellanea Giovanni Mercati* Vol. V. pp. 69-112 (1946), pp. 106-108 は551年の出来事だとしている。

44）François Nau, "L'expansion nestorienne en Asie", in *Annales du Musée Guimet, Bibliothèque vulgarisation*, Vol. 40 (1914), pp. 247-248. Nau の論拠は、有名なカラバルガスン Karabalgasun 碑文にみえる高僧は「ネストリウス派」のキリスト教徒であったという結論におおむね基づいていたのだが、Chavannes (1897), p. 85 は、それ以前にすでに碑文に記されている宗教を特定することは不可能であるという結論を下していたのであった。Edouard Chavannes, "Le Nestorianisme et l'Inscription de Kara-Balgassoun" *Journal Asiatique*, Vol. IX (ser.) No. IX (Tom.), pp. 43-85 を参照。[訳註12)]

45）*Majdal* II, ١١١/64, ١٢۶/73。エリア Elia は、カシュガルの首都大司教としてジョンJohn（يوانيس〔ヨワーニース Yowānīs〕）とサブリショ Sabrisho（سبريسوع〔Sabrīšū' サブリーシュー〕）の２人を連続して任命した。

46）Majdal II, ١٢۶/73. Eduard Sachau, *Zur Ausbreitung des Christentums in Asien* (Berlin, 1919), p. 22と Dauvillier, (1948), pp. 305-306 の考察を参照。

47）Paul Pelliot, *Recherches sur les chrétiens d'Asie centrale et d'Extrême-Orient*, Vol. 1 (Paris, 1973), pp. 6-7. Dauvillier (1948), pp. 285-286 と Hunter (1989/1991), pp. 158-159 はそれに従っている。Hunter は「西暦644年［Elia］と781/2年［Timothy］のどちらの場合もオグズ Oghuz 族が改宗の主人公だったように思われる」としているが、本稿で示される証拠によれば、その可能性は低そうである。

48）「最高の支配者」を意味する可汗 *qaghan* という称号は、初め柔然 Juan-Juan が使用していて、のちに古代テュルク語 Old Turkic（O.T. 𐰸𐰏𐰇）に借用された。それはギリシア人と中国人によってそれぞれ用いられた称号である「Βασιλεύς」や「天子 Son of Heaven」と社会における役割の点で同義語であった。可汗という称号は、王家であった阿史那 Ashina 氏族と関係がある王朝によってのみ用いられるようになったのであり、テュルク人世界では第1および第２突厥可汗国、ハザール人、ウイグル人、そしてカルルク人の支配者が可汗号を用いた。[訳註13)]

49）790年にチベットがベシュバリク Beshbaliq（現在の中国、ウルムチの近く）を占領した結果、ウイグル人は彼らの帝国の南側と西側地域に対する支配を失い、その地でカルルクは勢力基盤を強化することができるようになった。[訳註14)]

50）*Ibn Khurd*., 12。クローソン Clauson が指摘しているように、この古代の称号である yabghu は「可汗 xağan によって近縁者に贈られ、通常、それには可汗 xağan の領土の一部を管理する義務がともなった」。Gerard Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth Century Turkish* (Oxford, 1972)を参照。EI, s.v. 'Yabghu' を参照。840年にウイグル帝国が崩壊したことにともない、カルルクの指導者は「可汗」の称号を引き継いだようである。Peter B. Golden, "The Karakhanids and early Islam", *Cambridge History of Early Inner Asia* (Cambridge, 1990), pp. 349-351 を参照。

51）Colin Mackerras, "The Uighurs" *The Cambridge History of Early Inner Asia* (Cambridge, 1990), pp. 329-335.[訳註15)]

52）Omeljan Pritsak, "The Khazar Kingdom's Conversion to Judaism", *Harvard Ukrainian Studies*, Vol. 2. (1978), pp. 276-278.

53）G. Uray, "Tibet's Connections with Nestorianism and Manicheism in the 8th-10th Centuries", *Contributions on Tibetan Language, History and Culture*, pp. 399-429 (Vienna, 1983), p. 403.

54）Colin Mackerras, "The Uighur Empire according to the T'ang Dynastic Histories: a study in Sino-Uighur relations, 744-840 (2nd ed.) (Canberra, 1972), p. 10. Mackerras (1990), p. 333

も参照。

55）これらの説明はすべて、ティモテオスが言う改宗が起こったすぐ後、821年にタミーム・イブン・バフル Tamīm ibn Baḥr がウイグル人のところへ行った際の報告に基づいている。Vladimir Minorsky, “Tamīm ibn Baḥr’s Journey to the Uyghurs”, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol. 12 (1948) pp. 275-305 を参照。*Ibn Khurd.,* 22*; Ibn al-Faqih,* 388*; Qudāma*, 203 も参照。[訳註16)]

56）これ関しては、Li Tang, “A History of Uighur Religious Conversions (5th-16th Centruies)” *Asia Research Institute, Working Paper Series* (2005), pp. 39-41 を参照。[訳註17)]

57）*Gardizi*, 134。キリスト教徒を表すこのペルシア語の－パフラヴィー語〔中期ペルシア語〕M.P. ترسگ（タルサーグ tarsāg）；近代ペルシア語 N.P. ترسا（tarsā）は動詞 ترسیدن タルスィダーン tarsidān〔タルスィーダン tarsīdan の誤植〕「恐れる」に由来する。Shlomo Pines, “The Iranian name for Christians and the ‘God-Fearers’”, *Proceedings of the Israel Academy of Sciences and Humanities II* (Jerusalem, 1968) を参照。

58）*Ibn Khurd*., 22-23; *Ya‘qubi*, 113; *Ibn al-Faqih*, 388: Minorsky (1948), pp. 283-284. 中央アジアのテュルク族に関するもっとも早いイスラーム史料はイブン・フルダーズビフ Ibn Khurādhbih（885年頃）であるが、彼の記録は彼の時代からは1世紀前のことを扱っており、問題となっている改宗の時代状況を必ずしも反映しているわけではなかろう。中央アジアにおける地理的位置の関係で、ブルガール人 Bulgars やハザール人 Khazars はここでは考慮に入れられていない。また、バシキール人 Bahkir、ブルダス人 Burdas、チギル人 Chigil、サリール人 Sarir、そしてヤグマ人 Yaghma もまた、後の時代の史料にしか現れないのでここでは考慮されていない。タタール人 Tatar も、古代テュルク語ルーン文字によるオルホン碑文（720～735年）やルーン文字表記のウイグル語によるシネ-ウス碑文（759年）に現れているがここでは考慮されない。というのも、タタール人がその当時、テュルク系であったのか、モンゴル系 Mongolic であったのかが明らかでないためである。[訳註18)]

59）ペチェネグ人 Pechenegs の起源は非常に曖昧であり（*EI*, s.v. ‘Pečenegs,’ 289）、そのため、ここで問題になっている改宗当時、彼らが中央アジアに居住していたかどうかさえ不明である。

60）Talat Tekin, *A Grammar of Orkhon Turkic* (Bloomington, 1968), 234/267, 235/268, 237/271; G. J. Ramstedt, “Zwei Uigurische Runeninschriften in der Nord-Mongolei” *Journal de la Societé Finno-Ougrienne*, Vol. 13. (1913), pp. 12-13, pp. 16-17.

61）*Baladhuri* II, pp. 205-206.

62）Daniel Chwolson, “Syrisch-Nestorianische Grabinschriften aus Semirjetschie” *Mémoires de l’Académie impériale des sciences de St.-Pétersbourg* (St Petersburg, 1890), p. 107; Wilhelm Barthold, *zur Geschichte des Christentums in Mittel-Asien bis zur mongolischen Eroberung* (Turnhout and Leipzig, 1901), p. 42.

63）*Chron*. Syr. 218/196.

64）*Qazwini* II, ۳۹۴-۳۹۵のアラビア語からの翻訳については、Amina Elbendary に感謝する。ビールーニー Biruni のもともとの報告では、グッズ Ghuzz 人がその痕跡を崇拝することをキリスト教信仰だとはしていない（*Biruni*, 255）。その報告はまた、*Qazwini* I, 397 や Vladimir Minorsky, “The Khazars and Turks in the *Ākām al-Marjān”, Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol. IX (1937), p. 147 でも繰り返し述べられており、そのどちらもキリスト教と結び付けてはいない。

65）Anatoly Khazanov, “The Spread of World Religions in Medieval Nomadic Societies of the Eurasian Steppes” *Nomadic Diplomacy, Destruction and Religion from the Pacific to the Atlantic* (Toronto, 1994), p. 20.

66）Ramstedt (1913), pp. 4-9.

67）ウイグル人の間のキリスト教に関して論じている上述の脚注を参照。

68）*Manas* III, 60, 61, 147, 185, 263。このペルシア語のタルサーの用例をみると、中央アジアを通じていくつかの異なる文献で「ネストリウス派の」キリスト教徒に用いられていることから、キルギズ人の歴史のなかでは比較的古い時代に遭遇したシリア教会のキリスト教徒 Syriac Christians をこの語は指しているのであって、19世紀になってキルギズ人が接触するようになったロシア正教会のキリスト教徒 the Russian Orthodox Christians のことを言っているのではないということが示唆される。

69）С.Г. Кляшторный, “Историко-культурное значение Суджинской надписи”, *Проблемы Востоковедения*, Vol. V, (1959), p. 169.

70）*Marvazi*, IX.3 (29, 98).

71）*Michael* XIV.4 (570-571/III, 155).

72）キプチャク人 Qipchaqs に吸収される以前のクーン人 Qūn の民族的な起源ははっきりしていない。Peter Golden, “Religion among the Qipčaqs of Medieval Eurasia”, *Central Asiatic Journal*, Vol. 42. pp. 180-237 (1998), p. 185 を参照。ペチェネグ人と同じように、ティモテオスが報告しているチュルク人の改宗当時のキプチャク人や彼らの祖先についてはほとんど何もわかっていない（参照 *EI*, s.v. ‘Kipčak’）。Omeljan Pritsak, “Two Migratory Movements in the Eurasian Steppe in the 9th–11th Centuries”, *Proceedings of the 26th International Congress of Orientalists* (New Delhi, 1968), p. 160 は、問題となっている移住が900年頃に起きたのではないかとしている。キプチャク人の間のキリスト教に関しては、Golden, (1998), pp. 217-222 を参照。

73）*Majdal* II, ۱۲۶/73; M. Siouffi, “Notice sur un patriarche nestorien”, *Journal Asiatique*, Vol. VII, No. XVII (1881), pp.

89-96, p. 95.

74）*Syn. Or*., 619 Jacques-Marie Vosté, 1940, *Ordo Iudiciorum Ecclesiasticorum, collectus, dispositus, ordinatus et compositus a Mar ‘Abdišo‘ Metropolita Nisibis et Armenia* (Vatican City, 1940), p. 56.

75）Tekin, (1968), 236/270; Ramstedt, (1913), pp. 16-17, pp. 24-25. このように考えたのは、私が最初ではない。ロシア人研究者の Sergey Klyashtorniy も同じように考えており、A. B. Nikitin がそれに従った。このことは私自身が独自に同じ結論に至ったのちに初めて気付いたのであった［Кляшторный (1959), p. 168; А.Б. Никитин “Христианство в Центральной Азии”, Восточный Туркестан и Средняя Азия: История, Культура, Связи, (Moscow, 1984), p. 127］。あいにく、彼らの出版物はロシア語であるため、この問題を検討していたロシア人以外の研究者たちには見落とされていた。カルルクとの関連はまた、Gillman and Klimkeit, (1999), pp. 214, 218, 222 に見られるいくつかの相互に関連しない説明文においても示唆されているが、著者たちはそれらを関連付けて論じていないし、この問題をそれ以上深く追求することもしていない。Hans-Joachim Klimkeit “Christian Art on the Silk Road”, *Künstlerischer Austausch. Artistic Exchange: Akten des XXVIII. International Kongresses für Kunstgeschichte, Berlin, 15-20 Juli 1992*, (Berlin, 1993), pp. 481-482にも類似する考えが示されている。

76）*Narshakhi*, 86-87。サーマーン朝はブハラを本拠地とするペルシア人のイスラーム教徒の王朝であり、アラブのカリフ帝国に忠誠を尽くす同盟国である。*Baladhuri* I, pp. 191-192に記録されているように、キリスト教会をモスクに変える行為は、少なくともカリフ・アブド・アル-マリク・イブン・マルワーン Caliph ‘Abd al-Malik ibn Marwān（685～705年）の治世に聖ヨハネ St John 教会をダマスカスの大モスクに改変したことにまで遡ることができる。

77）もともとは「婦人」や「妻」を意味する（ソグド語から借用した）テュルク語の語で、この称号は「可汗」の妻に対して用いられた。Clauson (1972), pp. 602-603 を参照。[訳註19)]

78）*Ṭabari* XXXVIII, 11; *Masūdi* § 3284 (V, 1319)。 Omeljan Pritsak, “Von den Karluk zu den Karachaniden”, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, Vol. CCI (1951), pp. 288-290の考察も参照; István Zimonyi, *The Origins of the Volga Bulghars* (Szeged, 1990), pp. 169-172 および *Narshakhi*, p. 150。

79）*Chron*. Syr. 166/151。逆に、もしバル・エブローヨーがタラーズにある教会について知っていたならば、彼は確実にそのことを記していたに違いないとも考えられるだろう。

80）*Ibn Khurd*., 21.

81）Dauvillier (1948), p. 285.

82）*Narshakhi*, 53.

83）その後それほど時間を経ていない時代に、イブン・アル-ファキーフ Ibn al-Faqih（902年頃）は、サマルカンドの教会について、それは良く知られた場所で、「時を経ても存続するのにもっとも相応しく、もっとも消し去られる恐れがないほど離れたところ le plus dignes de demeurer sur la face du temps et le plus éloignés d’être effaces」の1つであると記している（*Ibn al-Faqih*, pp. 296-297）。[訳註20)]

84）Pritsak (1951); Golden (1990), pp. 354-357 を参照。

85）*Ibn Misk*. V, p. 196; Golden (1990), p. 354.

86）*Chron. Eccl*. II, 281/282: Mingana (1925), p. 309.[訳註21)]

87）Golden (1990), p. 357. これは Pritsak (1951), pp. 288-291 に従っている。

88）Devin DeWeese “Yasavian Legends on the Islamization of Turkistan”, *Aspects of Altaic Civilization III: Proceedings of the thirtieth Meeting of the Permanent International Altaistic Conference*, (Bloomington, 1990), pp. 8-12.

89）А. Н. Бернштам *Памятники Старины Таласской Долины* (Alma-Ata, 1941), pp. 21-22.

90）Л. И. Ремпель “Некрополь Древнего Тараза”, *Краткие Сообщения Института Истории Материальной Культуры*, (1957), p. 110; Frantz Grenet *Les pratiques funéraires dans l’Asie centrale sédentaire de la conquête grecque à l’islamisation*, (Paris, 1984), p. 180.

91）К. М. Байпаков “Христианство Казахстана в Средние Века”, *Из Истории Древних Культов Средней Азии: Христианство* (Tashkent, 1994), p. 99.

92）Marie Adelaide Lala Comneno “Nestorianism in Central Asia during the First Millennium: Archaeological Evidence”, *Journal of Assyrian Academic Studies*, Vol. XI (1997), p. 41.

93）これらの物証の多くは以下の文献に簡潔に述べられている。В. Д. Горячева & С. Я. Перегудова, “Памятники Христианства на Территории Кыргызстана”, *Из Истрории Древних Культов Средней Азии: Христианство*, (Tashkent, 1994); Байпаков, (1994); Grigori L. Semenov, *Studien zur sogdischen Kultur an der Seidenstraße*, (Wiesbaden, 1996), pp. 62-68; Lala Comneno (1997), pp. 40-45; Wassilios Klein, *Das nestorianische Christentum an den Handelswegen durch Kyrgyzstan bis zum 14 Jh* (Turnhout, 2000), pp. 101-125.

94）Wassilios Klein, “A Newly Excavated Church of Syriac Christianity along the Silk Road in Kyrghyzstan”, *Journal of Eastern Christian Studies* Vol. 56 (2004), pp. 25-47.

95）Daniel Chwolson, “Syrisch-Nestorianische Grabinschriften aus Semirjetschie” *Mémoires de l’Académie impériale des Science de St.-Petersbourgh* (1890); Daniel Chwolson, *Syrich-Nestrianische Grabinschriften aus Semirjetschie Neue Folge* (St Petersburg,1897). 1886年に出版されたChwolson〔Даниил Авраамович Хвольсон〕による最初の報告書の１番目の墓石は、当初は858年のものとされた。後に彼はこれを1258年に訂正した［Daniel Chwolson “Syrisch

Grabinschriften aus Semirjetschie", *Mémoires de l'Académie impériale des Science de St.-Pétersbourg, Vol. VII* (1886), pp. 7-8; Chwolson (1890), p. 15]。しかし、研究書や論文では誤った年代が引用され続け、もっとも古い墓石は９世紀のものであるという印象を与えてきた［例としては、Mingana (1925), p. 334; Dauvillier (1948), p. 290; Lala Comneno (1997), p. 40]。もう１つ別の墓石は、当初は911年のものとされたが、後になって、不明瞭すぎるため Chwolson は〔その年代比定を〕放棄した［Chwolson (1886), p. 8; Chwolson (1890), p. i]。このように、Chwolson の集成資料のなかでもっとも古い墓石は、1201年もしくは1186年に比定することしかできない［Chwolson (1897), pp. 5-6]。Chwolson の集成資料に含まれていないもう1つの墓石は、789年もしくは909年のものとされてきたが、Wassilios Klein は、そこに記された年数はむしろ1114/15年と読まれるべきであることを示した（Klein (2000), pp. 163-165)。12世紀の可能性がある墓石は２つしかなく（両方とも読みは不確か)、集成資料の大多数は13世紀半ばから14世紀半ばに比定されることから、カルルク人の間でキリスト教が信仰されていたことの直接的な証拠としてそれらを用いることはできない。

96）ユーラシアの草原地帯で見られる世界宗教への改宗に関する非常に優れた考察については Khazanov (1994) を参照。

97）Khazanov (1994), p. 15.

98）Khazanov (1994), pp. 16, 18.

99）Khazanov (1994), p. 19.

100）後に、ウイグル人はモンゴル人に対して同じような役割を果たした。

101）残念なことに、この往復書簡は残っていない。

102）類似することが、おそらくブルガリアのボリス Boris 1世の例に見てとることができる。彼の支配下ではブルガリア人のキリスト教への改宗が速やかに進んだ。彼は865年に洗礼を受けた後、カトリック教会 the Catholic Church から（カトリックに留まるようにとの）要請はあったのだが、ボリスが彼の国に独自の総大司教 Patriarch を置くことをローマ教皇 the Pope が認めなかったため、結局、正教会 the Orthodox Church の側につくことに決めたのである。

103）*Ṭabari* XXXI, 71.

104）Wilhelm Barthold, *Turkestan down to the Mongol Invasion*, (London, 1968), p. 202.

105）書簡が795年から798年の間に書かれたとすれば、これは合理的な推定である。この点については Uray (1983), p. 403, n. 415 の考察を参照。

106）Sachau (1919), pp. 21-22 には、関連する首都大司教座のリストのすぐれた要約が含まれている。

107）*B.O.* II, pp. 458-460.

108）*Ibn aṭ-Ṭayyib* VI.16 (II, 123). 彼は短縮形ではない形式 سمرقند〔サマルガンド Samarqand〕を伝えている。

109）Vosté (1940), p. 13.

110）Syn. Or., 619-620: Vosté (1940) pp. 56-57.

111）ラズィカーイエー *Raziqāyē* とは、古いペルシアの都市ラガ Ragha の住民のことである。ここはテヘランの近くに位置し、現在ではライ Rayy と呼ばれる。[訳註22)]

112）J.-B. Chabot は、これはアルメニア語の *Sinnik* が崩れた形式であろうとしている（*Syn. Or.*, 620, n. 2)。

113）このリストはイスハーク Isḥaq（イサク Isaac）の教会会議（410年）に由来するCanon XXIに含まれており、アブディショーは彼の時代の情勢を反映するためにこのリストを改新している。

114）Majdal II, ١٢٦/73.

115）これは、ここで引用されているイスラーム教徒による一次資料なかでは唯一翻訳されていないものであり、ページ〔数〕はアラビア語テキストのものである。

116）*Ṭabari* からの引用は、*Bibliotheca Persica* (SUNY) の翻訳の巻数に対応している。

略号

'Abdisho, Nom. = Mai, 1838
Baladhuri I = Hitti, 1916
Baladhuri II = Murgotten, 1924
Biruni = Sachau, 1879
B.O. = Assemani, 1719–1728
Chron. Eccl. = Abbeloos & Lamy, 1872–1877
Chron. Syr., T = Bedjan, 1890
Chron. Syr., V = Budge, 1932
EI = *Encyclopaedia of Islam*, Second Edition
Gardizi = Martinez, 1982
Governors, T = Budge, 1893a
Governors, V = Budge, 1893b
Histoire = Bedjan, 1895
Ibn al-Faqih = Masse,´ 1973
Ibn aṭ-Ṭayyib = Hoenerbach & Spies, 1957
Ibn Khurd. = de Goeje, 1889
Ibn Misk. = Margoliouth, 1921
Khuzistan, T = Guidi, 1903a
Khuzistan, V = Guidi, 1903b
Majdal I = Gismondi, 1899
Majdal II = Gismondi, 1896–1897
Marvazi = Minorsky, 1942
Manas = Орозбак & Айтматов, 1978–1982
Masudi = Pellat, 1962–1997
Michael = Chabot, 1899–1910
M.P. = Middle Persian
Narshakhi = Frye, 1954
N.P. = New Persian
O.T. = Old Turkic
Qazwini I = Ethé, 1868

Qazwini II = Wüstenfeld, ¨ 1848[115)]
Qudama = de Goeje, 1889
Syn. Or. = Chabot, 1902
Ṭabari = Various, 1987–1999[116)]
Timothy (Bidawid) = Bidawid, 1956
Timothy (Braun I) = Braun, 1901b
Timothy (Braun II), T = Braun, 1915b
Timothy (Braun II), V = Braun, 1915c
Yaqubi = Wiet, 1937

文献目録

Abbeloos, Jean-Baptiste & Thomas Joseph Lamy, ed. & tr., 1872–1877. *Gregorii Barhebraei Chronicon Ecclesiasticum* (3 vols). Louvain & Paris: E. Peeters & Maisonneuve.

Assemani, Joseph Simon, 1719–1728. *Bibliotheca Orientalis Clementino-Vaticana* (4 vols). Rome: Typis Sacrae Congregationis de Propaganda Fide.

Barthold, Wilhelm, 1901. *Zur Geschichte des Christentums in Mittel-Asien bis zur mongolischen Eroberung*. Turnhout & Leipzig: J. C. B. Mohr.

Barthold, Wilhelm, 1968. *Turkestan down to the Mongol Invasion* (E. J. W. Gibb Memorial Series, N.S., Vol. 5). London: Luzac & Co.

Baumstark, Anton, 1922. *Geschichte der syrischen Literatur mit Ausschluss der christlich-palastinensichen Texte*. Bonn: A. Marcus und E. Webers Verlag.

Beckwith, Christopher I., 1987. *The Tibetan Empire in Central Asia*. Princeton: Princeton University Press.

Bedjan, Paul, ed., 1890. *Gregorii Barhebraei Chronicon Syriacum*. Paris: Maisonneuve.

Bedjan, Paul, ed., 1895. *Histoire de Mar-Jabalaha, de trois autres patriarches, d'un prêtre et de deux la¨ıques, nestoriens* (2nd ed.). Leipzig: Otto Harrassowitz.

Bidawid, Raphael, ed. & tr., 1956. *Les lettres du patriarche nestorien Timothée I: étude critique avec en appendice la lettre de Timothée I aux moines du couvent de Mār Mārōn* (Studi e Testi 187). Citta del Vaticano: Biblioteca Apostolica Vaticana.

Braun, Oskar, 1901a. "Der Katholikos Timotheos I und seine Briefe," in *Oriens Christianus*, Vol. 1: 138–152.

Braun, Oskar, 1901b. "Ein Brief des Katholikos Timotheos I über biblische Studien des 9 Jahrhunderts," in *Oriens Christianus*, Vol. 1: 299–313.

Braun, Oskar, tr., 1915a. *Ausgewählte Akten persischer Märtyrer* (Bibliothek der Kirchenvater, Band 22). Kempten & München: J. Kösel.

Braun, Oskar, ed., 1915b. *Timothei Patriarchae I Epistulae I [Text]* (Corpus Scriptorum Christianorum Orientalium 74/Syr. 30). Paris: J. Gabalda.

Braun, Oskar, tr., 1915c. *Timothei Patriarchae I Epistulae I [Trans]* (Corpus Scriptorum Christianorum Orientalium 75/Syr. 31). Paris: J. Gabalda.

Budge, Ernest A. Wallis, ed., 1893a. *The Book of Governors: The Historia Monastica of Thomas Bishop of Marga A. D. 840, Vol. I: The Syriac Text, Introduction, etc*. London: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co.

Budge, Ernest A. Wallis, tr., 1893b. *The Book of Governors: The Historia Monastica of Thomas Bishop of Marga A. D. 840, Vol. II: The English Translation*. London: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co.

Budge, Ernest A. Wallis, tr., 1932. *The Chronography of Gregory Abû'l Faraj, the son of Aaron, the Hebrew Physician, commonly known as Bar Hebraeus, being the First Part of his Political History of the World, Vol. I.* Oxford: Oxford University Press.

Chabot, Jean-Baptiste, ed. & tr., 1899–1910. *Chronique de Michel le Syrien, Patriarche Jacobite d'Antioche 1166–1199* (4 vols). Paris: Ernest Leroux.

Chabot, Jean-Baptiste, ed. & tr., 1902. *Synodicon Orientale ou Recueil de Synodes Nestoriens* (Notices et extraits des manuscrits de la Bibliothèque Nationale et autres bibliothèques, Vol. 27). Paris: Imprimerie Nationale.

Chavannes, Edouard, 1897. "Le Nestorianisme et l'Inscription de Kara-Balgassoun," in *Journal Asiatique*, Vol. IX (Ser.), No. IX (Tom.): 43–85.

Chwolson, Daniel, 1886. "Syrisch Grabinschriften aus Semirjetschie," in *Mémoires de l'Académie impériale des sciences de St.-Pétersbourg*, Vol. VII (Ser.), No. XXXIV (Tom.), No. 4: 1–30.

Chwolson, Daniel, 1890. "Syrisch-Nestorianische Grabinschriften aus Semirjetschie," in *Mémoires de l'Académie impériale des sciences de St.-Pétersbourg*, Vol. VII (Ser.), No. XXXVII (Tom.).

Chwolson, Daniel, 1897. *Syrisch-Nestorianische Grabinschriften aus Semirjetschie. Neue Folge*. St. Petersburg: Imprimerie de l' Académie Impériale des Sciences. ´

Clauson, Gerard, 1972. *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth Century Turkish*. Oxford: Clarendon Press.

Czegledy, Károly, 1954. "Monographs on Syriac and Muhammadan Sources in the Literary Remains of M. Kmosko," in *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, Vol. 4: 19–91.

Dauvillier, Jean, 1948. "Les Provinces Chaldéennes "de l'Extérieur" au Moyen Age," in *Mélanges offerts au R. P. Ferdinand Cavallera: 260–316*. Toulouse: Bibliothèque de l'Institut Catholique [repr: *Histoire et institutions des Eglises orientales au Moyen Age*, by Jean Dauvillier. London: Variorum, 1983, Article I].

Dauvillier, Jean, ed. 1983. *Histoire et institutions des Eglises orientales au Moyen Age* (Collected Studies Series 173). London: Variorum.

de Goeje, M. J., ed. & tr., 1889. *Kitâb al-Masâlik wa'l-Mamâlik, Auctore Abu'l-Kâsim Obaidallah ibn Abdallah Ibn Khorâdhbeh* (Bibliotheca Geographorum Arabicorum VI). Lugduni Batavorum: E. J. Brill.

DeWeese, Devin, 1990. "Yasavian Legends on the Islamization of Turkistan," in *Aspects of Altaic Civilization III: Proceedings of the Thirtieth Meeting of the Permanent International Altaistic Conference* (Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series, Vol. 145), ed. by Denis Sinor: 1–19. Bloomington: Indiana University.

Ethe, Hermann, tr., 1868. *Zakarija Ben Muhammed Ben Mahmûd el-Kazwîni's Kosmographie, Erster Halbband: Die Wunder der Schöpfung*. Leipzig: Fues's Verlag.

Frye, Richard N., tr., 1954. *The History of Bukhara*. Cambridge, MA: Mediaeval Academy of America.

Gillman, Ian & Hans-Joachim Klimkeit, 1999. *Christians in Asia before 1500*. Ann Arbor: University of Michigan Press.

Gismondi, Enrico, ed. & tr., 1896–1897. *Maris Amri et Slibae. De Patriarchis Nestorianorum. Commentaria, Pars Altera (Amri et Slibae)*. Rome: C. de Luigi.

Gismondi, Enrico, ed. & tr., 1899. *Maris Amri et Slibae. De Patriarchis Nestorianorum. Commentaria, Pars Prior (Maris)*. Rome: C. de Luigi.

Golden, Peter B., 1990. "The Karakhanids and early Islam," in *The Cambridge History of Early Inner Asia*, ed. by Denis Sinor: 343–370. Cambridge: Cambridge University Press.

Golden, Peter B., 1998. "Religion among the Qıpčaqs of Medieval Eurasia," in *Central Asiatic Journal*, Vol. 42: 180–237.

Grenet, Frantz, 1984. *Les pratiques funeraires dans l'Asie centrale sédentaire de la conquête grecque à l'islamisation* (Publications de l'U.R.A. 29, Memoire No. 1). Paris: Editions du Centre national de la recherche scientifique.

Guidi, Ignazio, 1893. "Un nuovo testo siriaco sulla storia degli ultimi Sassanidi," *in Actes de Huitième Congrès International des Orientalistes, tenu en 1889 à Stockholm et à Christiania, Section I: Semitique, Sous-section B: 3–36*. Leiden: E. J. Brill.

Guidi, Ignazio, ed., 1903a. *Chronica Minora: Chronicon anonymum de ultimis regibus Persarum [Text]* (Corpus Scriptorum Christianorum Orientalium 1/Syr. 1). Paris: Typographeo Reipublicae.

Guidi, Ignazio, tr., 1903b. *Chronica Minora: Chronicon anonymum de ultimis regibus Persarum [Trans]* (Corpus Scriptorum Christianorum Orientalium 2/Syr. 2). Paris: Typographeo Reipublicae.

Hitti, Philip Khuri, tr., 1916. *The Origins of the Islamic State, Vol. I (Kitâb Futuḥ al-Buldân of al-Balâdhuri)* (Studies in History, Economics and Public Law, Vol. LXVIII). New York: Columbia University Press.

Hoenerbach, Wilhelm & Otto Spies, tr., 1957. *Ibn aṭ-Ṭaiyib, Fiqh an-Naṣrânîya: «Das Recht der Christenheit» II [Trans]* (Corpus Scriptorum Christianorum Orientalium 168/Ar. 19). Louvain: Imprimerie Orientaliste L. Durbecq.

Hunter, Erica C. D., 1989/1991. "The Conversion of the Kerait to Christianity in A.D. 1007," in *Zentralasiatische Studien*, Vol. 22: 142–163.

Hunter, Erica C. D., 1996. "The Church of the East in Central Asia," in *Bulletin of the John Rylands University Library*, Vol. 78, No. 3: 129–142.

Khazanov, Anatoly M., 1994. "The Spread of World Religions in Medieval Nomadic Societies of the Eurasian Steppes," in *Nomadic Diplomacy, Destruction and Religion from the Pacific to the Atlantic* (Toronto Studies in Central and Inner Asia, No. 1), ed. by Michael Gervers & Wayne Schlepp: 11–33. Toronto: Joint Centre for Asia Pacific Studies.

Klein, Wassilios, 2000. *Das nestorianische Christentum an den Handelswegen durch Kyrgyzstan bis zum 14. Jh* (Silk Road Studies III). Turnhout: Brepols.

Klein, Wassilios, 2004. "A Newly Excavated Church of Syriac Christianity along the Silk Road in Kyrghyzstan," in *Journal of Eastern Christian Studies*, Vol. 56 (Symposium Syriacum VII): 25–47.

Klimkeit, Hans-Joachim, 1993. "Christian Art on the Silk Road," in *Kunstlerischer Austausch. Artistic Exchange: Akten des XXVIII. Internationalen Kongresses für Kunstgeschichte, Berlin, 15.–20. Juli 1992*, ed. by Thomas W. Gaehtgens: 477–488. Berlin: Akademie Verlag.

Kmoskó, Mihály & Felföldi Szabolcs, 2004. Szír írók a steppe népeirfól [Syriac sources on the peoples of the steppe] (Magyar´´Ost¨ort´eneti K¨onyvt´ar [Library of Hungarian Prehistory], Vol. 20). Budapest: Balassi Kiado´.

Labourt, Jerome, 1904a. *De Timotheo I Nestorianorum Patriarcha (728–823) et Christianorum Orientalium condicione sub Chaliphis Abbasidis*. Paris: Victor Lecoffre.

Labourt, Jerome, 1904b. *Le Christianisme dans l'Empire Perse sous la Dynastie Sassanide (224–632)* (2nd ed.). Paris: Victor Lecoffre.

Lala, Comneno, Maria Adelaide, 1997. "Nestorianism in Central Asia during the First Millennium: Archaeological Evidence," in *Journal of Assyrian Academic Studies*, Vol. 11, No. 1: 20–69.

Landron, Ben´edicte, 1994. *Chretiens et Musulmans en Irak: Attitudes Nestoriennes vis-à-vis de l'Islam*. Paris: Cariscript.

Mackerras, Colin, 1972. *The Uighur Empire according to the T'ang Dynastic Histories: a study in SinoUighur relations, 744–840* (2nd ed.) (Asian Publication Series, Vol. 2). Canberra: Australian National University Press.

Mackerras, Colin, 1990. "The Uighurs," in *The Cambridge History of Early Inner Asia*, ed. by Denis Sinor: 317–342. Cambridge: Cambridge University Press.

Mai, Angelo, ed. & tr., 1838. *Scriptorum veterum nova collectio e*

vaticanis codicibus edita ab A.M., Vol. X. Rome: Typis Collegi Urbani.

Margoliouth, D. S., tr., 1921. *The Experiences of the Nations, by Miskawaihi* (7 vols). Oxford: Basil Blackwell.

Martinez, A. P., 1982. "Gardīzī's Two Chapters on the Turks," in *Archivum Eurasiae Medii Aevi*, Vol. 2: 109–217.

Massé, Henri, tr., 1973. *Ibn al-Faqīh al-Hamaḏānī: Abrégé du livre des pays*. Damascus: Institut Français de Damas.

Mingana, Alphonse, 1925. "The Early Spread of Christianity in Central Asia and the Far East: A New Document," in *Bulletin of the John Rylands Library*, Vol. 9, No. 2: 297–371 [repr: Manchester: Manchester University Press, 1925].

Minorsky, Vladimir, 1937. "The Khazars and Turks in the *Ākām al-Marjān," in Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol. 9: 141–150.

Minorsky, Vladimir, ed. & tr., 1942. *Sharaf al-Zamān Ṭāhir Marvazī on China, the Turks and India* (James G. Forlong Fund, Vol. XXII). London: Royal Asiatic Society.

Minorsky, Vladimir, 1948. "Tamīm ibn Baḥr's Journey to the Uyghurs," in *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol. 12: 275–305 [repr: *The Turks, Iran and the Caucasus in the Middle Ages*, by Vladimir Minorsky. London: Variorum, 1978, Article I].

Murgotten, Francis Clark, tr., 1924. *The Origins of the Islamic State, Vol. II (Kitāb Futuḥ al-Buldān of al-Balādhuri)* (Studies in History, Economics and Public Law, Vol. LXVIII). New York: Columbia University Press.

Nau, Franc¸ois, 1914. "L'expansion nestorienne en Asie," in *Annales du Musée Guimet, Bibliothèque de vulgarisation*, Vol. 40: 193–388.

Noldeke, Theodor, tr., 1893. *Die von Guidi herausgegebene syrische Chronik* (Sitzungsberichte der philosophisch-historischen Classe der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften, Band 128). Wien: F. Tempsky.

Payne Smith, Jessie, 1903. *A Compendious Syriac Dictionary, founded upon the Thesaurus Syriacus of R. Payne Smith*. Oxford: Clarendon Press [repr: Eugene, OR: Wipf and Stock, 1999].

Peeters, Paul, 1946. "Observations sur la vie syriaque de Mar Aba, Catholicos de l'église perse (540–552)," *in Miscellanea Giovanni Mercati*, Vol. V (Studi e Testi 125): 69–112.

Pellat, Charles, ed., 1962–1997. *Les prairies d'or* (5 vols). Paris: Société asiatique.

Pelliot, Paul, 1973. *Recherches sur les chretiens d'Asie centrale et d'Extréme-Orient, Vol. I* (Oeuvres Posthumes de Paul Pelliot). Paris: Imprimerie Nationale.

Pines, Shlomo, 1968. "The Iranian name for Christians and the 'God-Fearers'," in *Proceedings of the Israel Academy of Sciences and Humanities II*: 143–152 Jerusalem: Israel Academy of Sciences and Humanities [repr: *Studies in the History of Religion*, by Shlomo Pines, ed. by Guy Stroumsa. Jerusalem: Hebrew University, 1996, [11–20]].

Pritsak, Omeljan, 1951. "Von den Karluk zu den Karachaniden," in *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, Vol. 101 (N.S. 26): 270–300.

Pritsak, Omeljan, 1968. "Two Migratory Movements in the Eurasian Steppe in the 9th–11th Centuries," in *Proceedings of the 26th International Congress of Orientalists, New Delhi 1964, Vol. 2*: 157–163. New Delhi [repr: *Studies in Medieval Eurasian History*, by Omeljan Pritsak. London: Variorum, 1981, Article VI].

Pritsak, Omeljan, 1978. "The Khazar Kingdom's Conversion to Judaism," in *Harvard Ukrainian Studies*, Vol. 2: 261–281 [repr: *Studies in Medieval Eurasian History*, by Omeljan Pritsak. London: Variorum, 1981, Article XI].

Putnam, Hans, 1975. *L'Église et l'Islam sous Timothée I (780–823): Étude sur église nestorienne au temps des premiers abbasides* (Recherches publiées sous la direction de l'Institut de lettres orientales de Beyrouth, N. S. B. Orient chrétien, Tom. III). Beirut: Dar el-Machreq. ´

Ramstedt, G. J., 1913. "Zwei Uigurische Runeninschriften in der Nord-Mongolei," in *Journal de la Societé Finno-Ougrienne*, Vol. 30, No. 3: 1–63.

Sachau, Eduard, 1919. *Zur Ausbreitung des Christentums in Asien* (Abhandlungen der Preussischen Akademie der Wissenschaften, Phil.-hist. Klasse. Jahrgang 1919, Nr. 1). Berlin: Verlag der Akademie der Wissenschaften.

Sachau, Edward, tr., 1879. *The Chronology of Ancient Nations*. London: Oriental Translation Fund of Great Britain & Ireland.

Saeki, P. Y., 1951. *The Nestorian Documents and Relics in China* (2nd ed.). Tokyo: Maruzen Company Ltd.

Semenov, Grigori L., 1996. *Studien zur sogdischen Kultur an der Seidenstraße* (Studies in Oriental Religions, Vol. 36). Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Sims-Williams, Nicholas, 1993. "The Sogdian Inscriptions of Ladakh," in *Antiquities of Northern Pakistan: Reports and Studies* (Rock Carvings and Inscriptions along the Karakorum Highway, Vol. 2), ed. by Karl Jettmar: 151–163. Mainz: Verlag Philipp von Zabern.

Siouffi, M., 1881. "Notice sur un patriarche nestorien," in *Journal Asiatique*, Vol. VII (Ser.), No. XVII (Tom.): 89–96.

Tang, Li, 2005. "A History of Uighur Religious Conversions (5th–16th Centuries)" [Electronic Version], in *Asia Research Institute, Working Paper Series*, No. 44 (http://www.ari.nus.edu.sg/ showfile.asp?pubid=518&type=2).

Tekin, Talat, 1968. A *Grammar of Orkhon Turkic* (Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series, Vol. 69). Bloomington: Indiana University.

Uray, G., 1983. "Tibet's Connections with Nestorianism and Manicheism in the 8th–10th Centuries," in *Contributions*

on Tibetan Language, History, and Culture (Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Band 11), ed. by Ernst Steinkellner & Helmut Tauscher: ¨ 399–429. Wien: Universitat Wien [repr: Delhi: Motilal Banarsidass, ¨ 1995].

Various, tr., 1987–1999. *The History of al-Ṭabarī (Tārīkh al-rusul wa'l-mulūk)* (39 vols) (Bibliotheca Persica). Albany: State University of New York Press.

Voste, Jacques-Marie, tr., 1940. *Ordo Iudiciorum Ecclesiasticorum, collectus, dispositus, ordinatus et compositus a Mar 'Abdišo' Metropolita Nisibis et Armeniae* (Codificazione Canonica Orientale, Fonti, Serie II – Fascicolo XV. Caldei – Diritto Antico II). Cittá del Vaticano: Typis Polyglottis Vaticanis.

Wiet, Gaston, tr., 1937. *Ya'kūbī: Les Pays* (Textes et Traductions d'Auteurs Orientaux, Vol. 1). Cairo: Institut Français d' Archéologie Orientale. ´

Wright, William, 1894. *A Short History of Syriac Literature*. London: A. and C. Black [repr: Piscataway, NJ: Gorgias Press, 2001].

Wustenfeld, Ferdinand, ed., 1848. *Zakarija Ben Muhammed Ben Mahmud el-Cazwini's Kosmographie, Zweiter Theil: Die Denkmäler der Länder*. Göttingen: Dieterichschen Buchhandlung.

Zimonyi, István, 1990. *The Origins of the Volga Bulghars* (Studia Uralo-Altaica, Vol. 32). Szeged: Universitas Szegediensis de Attila Jozsef Nominata.

Байпаков, К. М., 1994. "Христианство Казахстана в Средние Века," in *Из Истории Древних Культов Средней Азии: Христианство*, ed. by Г. А. Пугаченкова & Ю. Ф. Буряков: 96–100. Ташкент: Главная редакция Энциклопедий.

Бернштам, А. Н., 1941. *Памятники Старины Таласской Долины*. Алма-ата: Казахское Объединенное Государственное Исдательство.

Горячева, В. Д. & С. Я. Перегудова, 1994. "Памятники Христианства на Территории Кыргызстана," in *Из Истории Древних Культов Средней Азии: Христианство*, ed. By Г. А. Пугаченкова & Ю. Ф. Буряков: 84–95. Ташкент: Главная редакция Энциклопедий.

Кляшторный, С. Г., 1959. "Историко-культурное значение суджинской надписи," in *Проблемы Востоковедения*, No. 5: 162–169.

Никитин, А. Б., 1984. "Христианство в Центральной Азии," in *Восточный Туркестан и Средняя Азия: история, культура, связи*, ed. by Борис Литвинский: 121–137. Москва: Наука.

Орозбак, Сагымбай & Чингиз Айтматов, ed., 1978–1982. *Манас* (4 vols). Фрунзе: Кыргыз ССР илимдер Академиясы.

Ремпель, Л. И., 1957. "Некрополь Древнего Тараза," in *Краткие Сообщения Института Истории Материальной Культуры*, Vol. 69: 102–110.

訳註

訳註１）原文の英語表記では「Timothy」であるが、本翻訳では「ティモテオス」とする。また、「Patriarch」の訳語としては「総大司教」を用いる（高橋英海「アッシリア東方教会」三代川寛子編『東方キリスト諸教会－研究案内と基礎データ』明石書店, 2017年, pp.322-332 を参照）。

訳註２）イスラーム教支配下にあってその保護下に入り、その信仰を認められた保護民。

訳註３）weather magic「天気の魔術」とは、内陸アジアの遊牧民のシャーマンが行う魔術である。通常ジャダと呼ばれる特殊な石（内臓結石の類い）を使い、突然激しい雨を降らせるものである。日本語で読める解説には羽田明「ジャダの呪術について――シャマニズムとイスラム――」『中央アジア史研究』京都, 1982 があり、英語では Ádám Molnár, Weather-magic in Inner Asia, Indiana, 1994 に詳しい研究がある。

訳註４）766年という年は、『新唐書』の「西突厥伝」に大暦年間（766-779年）よりのち, カルルクの勢力が盛大になったとあることに依っているようだ。

訳註５）ここでは、セルジュークの息子として4人の名前が挙げられているが、『新イスラム事典』によれば、アルスラーン・イスラーイール、ミーカーイール、ムーサー・ヤブグ、ユースフ・イナール、ユーヌスの５人が知られている（『新イスラム事典』平凡社, 2002年, p.581）。

訳註６）イスラーム神秘主義であるスーフィズムの修行者（スーフィー）たちが形成した教団組織。タリーカの原義は「道、方法」であるが、スーフィズムでは、「神へいたる道、修行の方法、修行道」を意味した。

訳註７）ヤアクービー Ya'qūbī によれば、カルルクのヤブグは、サマルカンドで起きた Rāfi' ibn al-Layth の反乱（806～810年）のとき反乱軍側に立ったが、その同じヤブグはカリフ・マフディー al-Mahdī（在位775～785年）のときイスラームに改宗したと伝えられている。吉田豊「カラバルガスン碑文に見えるウイグルと大食関係」『西南アジア研究』89, 2019, pp. 34-57、特にp. 41参照。確かに政治的・戦略的な配慮が見て取れる改宗である。ただその後の歴史を見れば、ヤブグが本当に改宗したのはキリスト教の方だったようだ。

訳註８）ウイグルが唐に対してマニ教の禁止令を撤回するように要求したという事実は伝えられていないが、主要な都市にマニ教寺院を設置させたことはあった。吉田豊／古川攝一（編）『中国江南マニ教絵画研究』京都: 臨川書店, 2015, pp. 37-41参照。

訳註９）ウイグルが唐側に立ってタラス戦に参戦したという事実はない。その時期はモンゴル高原の制圧に集中していた時代であり、対外的に派兵する余力はなかったと考えられる。

訳註10）上でも述べたように、カルルクのヤブグは少なくともイスラームを受け入れるポーズは見せたのだった。

訳註11）アッバース朝の第2代カリフであるアル-マンスールが新しい王朝の都をバグダードに定めたのは762年のことである。ディケンズの言う「750年」はアッバース朝が成立した年であり、それと混同しているのだろう。

訳註12）カラバルガスン碑文で問題になっている宗教は、その後すぐにマニ教であることが判明している。

訳註13）可汗号は初め鮮卑族が使い、その後漠北の遊牧民が用いたことが知られているが、ここで言われている阿史那族との関係は何に基づいているのか分からない。

訳註14）この部分での Dickens によるウイグルとチベットの関係についての理解は、40年以上も前に森安孝夫によって大幅に修正されている。現在は、森安孝夫「増補：ウイグルと吐蕃の北庭争奪戦およびその後の西域情勢について」（『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋, 2015, pp. 230-274所収）を参照せよ。さらに９世紀初めには、チュー川流域のカルルクはいったんウイグルに制圧されていた、吉田豊「カラバルガスン碑文に見えるウイグルと大食関係」『西南アジア研究』89, 2019, pp. 34-57。

訳註15）ウイグルのマニ教改宗のプロセスはここでの説明より遙かに複雑であった。この点については吉田豊「9世紀東アジアの中世イラン語碑文２件―西安出土のパフラビー語・漢文墓誌とカラバルガスン碑文の翻訳と研究―」『京都大学文学部研究紀要』59, 2020, pp. 97-269（特にpp. 138-148）参照。

訳註16）タミーム・イブン・バフルのウイグル訪問の年代を821年とする Minorsky の説は批判されている（吉田豊「カラバルガスン碑文に見えるウイグルと大食関係」『西南アジア研究』89, 2019, pp. 34-57）。実際にはもう少し早い時代であったと考えられる。

訳註17）森安孝夫「前近代中央ユーラシアのトルコ・モンゴル族とキリスト教」『帝京大学文化財研究所研究報告』第20集, 2021, pp.5-39 も参照されたい。

訳註18）タタールについても、森安孝夫前掲論文を参照されたい。

訳註19）Clauson はテュルク語の qatun (x'twn) はソグド語の xwt'yn からの借用語であると考えている。しかしこの xwt'yn は xwt'w「王」から派生した女性形であり、それがソグド語文献で x'twn と表記されることは決してない上に、ソグド語文献では別に可敦を意味する x'ttwnh, x't'wn という語が存在している。こちらはテュルク語の qatun の借用語であることは明らかで、両者はまったく別の語である。形式と意味が偶然似ているだけである。

訳註20）これは Dickens の誤解で、Ibn al-Faqīh の当該の箇所で問題になっているのは、「サマルカンドの門」であって「サマルカンドにあった教会の門」ではない。したがって Ibn al-Faqīh のこの記事からサマルカンドの教会がよく知られた場所であったとすることはできない。このことは高橋英海東京大学教授にご教示頂いた。記して謝意を表す。

訳註21）ケレイトのキリスト教改宗は森安孝夫前掲論文の主要なテーマである。是非とも参照されたい。

訳註22）現在の名称、そして現代ペルシア語としてはレイ Rei の方が適切である。